

かに

KANI



公益財団法人 がん研究振興財団

第52号 2025

表紙のことば

癌と云う病気の概念がはっきりしたのは、19世紀中葉以後の事であるが、癌と云う言葉自体は、東西ともに可成古くから行われている。英仏語の Cancerは、ラテン語のまま、蟹の意味を兼ねている。そして、このラテン語はまたギリシャ語のカルキノスから来ている。2,400年前のギリシャのヒポクラテスは、すでに病気としてのカルキノスの特徴を書き記したと云う。西紀200年に死んだローマの医師ガレノスは、カンケルを「時に潰瘍を伴う悪性の極めて硬い腫瘍」と定義した。蟹の字をこう云う病気の名にしたのは、昔から珍しくない乳癌の恰好が、蟹を連想させたからであろう。赤黒い、凹凸のある、醜いその外観は、まさに蟹の甲羅そのものだが、腋の下のリンパ腺まで病気が拡がり、しかも、その間を繋ぐ、リンパ管までおかされた、乳癌の末期の姿は、蟹の鉗やその足の節々をさえ、連想させる。

一方癌の字は、中野操氏の考証によれば、南宋の医書にすでに用いられているそうだ。病だれの中の品山は岩石の意味で、やはり皮膚癌や乳癌の外観からの表徴文字と察せられるが、この字は癌の組織の持つ大きな他の特徴——他の組織と比較にならぬ程、堅い性質——まで表示し得て、妙である。

表紙の絵は「がざみ」と呼ばれる「わたりがに」の一種で、太平洋の日本近海に普通の、食用蟹の一つである。海底の砂に巧みにもぐり込み、しかも、海を渡って遠くにまで行く。癌の持つ周囲組織へのもぐりこみ（浸潤）や、方々への飛び火（転移）は、この蟹の性癖で巧みに表現されている。

題字の達筆は藤井理事長の揮毫である。編集部苦心の作と察せられるこの加仁は、草書では「かに」となる。仁術に加えるもう一つのもの——一般人の理解と協力——なくしては、癌撲滅の大目的は達成し得られない事を、言外にうたっているものと云えようか。蟹の周囲のあみ目の一つ一つは癌の細胞である。

(久留 勝・くる まさる；国立がんセンター第3代総長)

公益財団法人がん研究振興財団の概要

沿革

- 昭和40年12月 「がん研究振興会」として発足
- 昭和43年 9月 厚生省より「財団法人がん研究振興会」として認可
- 昭和59年 3月 寄付行為改正により「財団法人がん研究振興財団」に名称変更
- 平成24年 4月 内閣総理大臣より「公益財団法人がん研究振興財団」として認可
(公益認定)

設立の経緯

遡ること約半世紀前の「がん」の状況は、社会においても家庭においてもかけがえのない立場にある年齢層の人達の健康にとって最大の脅威となっており、医学の進歩をもってしてもなお、未知の分野を多く残していました。

国のがん対策は、昭和37年我が国初のがん専門病院として国立がんセンターが開設され、専門的な研究、診断、治療が行われました。

当財団の設立に当っては、「がん」について医学的にも未知の分野が広く、研究すべきことが山積した状況の中で、官民一体となり、国費のほか一般の方々からの浄財を以てがんの治療、予防技術の開発事業を行うため、昭和40年12月「がん研究振興会」として発足し、その後昭和43年9月、初代会長に経済団体連合会会長であった石坂泰三氏、副会長に富士銀行頭取の岩佐凱實氏、理事長に八幡製鉄副社長藤井丙午氏、常務理事に経済団体連合会専務理事花村仁八郎氏による経済界を挙げての組織体制により厚生省から財団法人として認可設立されました。

昭和59年度からは、国による「対がん10か年戦略」に伴う事業を実施するため、昭和59年3月名称を「財団法人がん研究振興財団」と改め、推進事業を30年に亘り実施して参りました。

また、平成24年4月に内閣総理大臣から全事業を公益事業とする公益認定を受けております。

事業内容

- (1) がん研究に関する研究の助成
- (2) がん研究に関する国際協力及び国際交流
- (3) がん研究に関する若手研究者の育成
- (4) がん研究に関する国民への情報発信
- (5) がん研究に関する国内外諸団体との連携及び協力
- (6) その他本財団の目的を達成するために必要な事業

巻頭言

がんゲノム医療の現状と将来

国立がん研究センター 理事長・研究所長 間野博行 4

特集1 令和6年度がん研究シンポジウム

「がんRNA標的創薬の展望」開催のご報告

国立がん研究センター 研究所
がんRNA研究分野 分野長 吉見昭秀 6

特集2 令和6年度がんサバイバーシップ研究成果発表会開催報告

埼玉医科大学 医学部社会医学 教授 亀井美登里 9

特集3 令和6年度がんサバイバーシップ研究セミナー開催報告

～がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき～

NPO法人日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事

岩手医科大学客員教授、東京慈恵会医科大学客員教授 高橋都 12

令和6年度事業実績

がん情報提供支援事業運営委員会報告 上田龍三 16

がん研究助成審議会報告 村上善則 19

H O P E 事業等運営委員会報告 村上善則 26

がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会報告 亀井美登里 29

海外派遣研究助成委員会報告 菅野純夫 32

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会報告 桑原節子 38

事業実績2000～2024 41

令和7年度事業計画 51

ご寄付芳名録 54

役員・評議員・顧問名簿 55

あとがき 56

がんゲノム医療の現状と将来



国立がん研究センター
理事長・研究所長 間野博行

がんゲノム研究が進むことにより、発がんに直接寄与する遺伝子変異（ドライバーがん遺伝子）が数多く同定され、それぞれのタンパク産物に対する特異的阻害薬（分子標的治療薬）が次々と開発されてきた。また同一のドライバー変異が頻度は違うものの様々ながん種に広範に存在することも、がんゲノム解析の結果明らかになった。したがって、がんを診断する際に、対応する治療薬・臨床試験があるような遺伝子変異は一度に網羅的に解析しようという流れが出現した。ほぼ時を同じくして次世代シーケンサーが登場し大量の塩基配列決定が可能になると、がんに関連する遺伝子の変異を網羅的に調べる「がん遺伝子パネル検査（または、がんゲノムプロファイリング検査）」が登場し、その解析結果で治療法を最適化する「がんゲノム医療」が実際の臨床の場にもたらされた。

日本においても、2017年春に厚生労働省において「がんゲノム医療推進コンソーシアム懇談会」が開催され、日本の国民皆保険制度の下でのゲノム医療体制についてグランドデザインが討議された。その結果、(1) まずは安全かつ

効率良くがんゲノム医療を行える病院を選定して保険診療のがんゲノム医療を行うこと、さらにそれら病院ネットワークは漸次拡大すること、また(2) がんゲノム医療を受ける患者のゲノム情報と臨床情報を集約するデータセンターとして「がんゲノム情報管理センター（Center for Cancer Genomics and Advanced Therapeutics: C-CAT）」を設置することが提案された。これらの提言に基づき2019年6月に「OncoGuide NCC オンコパネルシステム」と「FoundationOne CDxがんゲノムプロファイル」の2種類の遺伝子パネル検査が保険償還され、実際のがんゲノム医療が始まったのである。2025年3月現在、がんゲノム医療を保険で行う病院として、がんゲノム医療中核拠点病院13カ所、がんゲノム医療拠点病院32カ所、がんゲノム医療連携病院234カ所が指定・公開されており、計279カ所の医療機関においてがんゲノム医療が実施されている。

がんゲノム医療実施機関で、がん遺伝子パネル検査の患者同意が得られると、検体は検査会社に送付されて、次世代シーケンサーを用

いたがん遺伝子パネル検査が行われる。我が国においては、患者同意の下で検査会社からシーケンスデータがC-CATに送られてくる。また医療機関からも患者同意の下で臨床情報がC-CATに送付される。C-CATではデータ受領から2営業日以内に、患者毎の遺伝子変異それぞれに対して、対応する保険収載薬あるいは臨床試験情報をまとめた「C-CAT調査結果」を作成し、医療機関にエキスパートパネルの補助資料用に送付する。

C-CATへの情報集約は順調に進行しており、2025年2月末で約10万例ものデータが収集された。こうして集積された世界有数のデータは様々な形で医療・医学へ応用されている。たとえばゲノム医療参加施設においては「診療検索ポータル」を通じて、C-CATデータをリアルタイムに共有可能となっており日常診療に役立っている。またゲノム医療施設以外の研究機関・企業にもC-CATデータは広く利用可能であり、利用申請が認可されると「利活用検索ポータル」を通じて、個人情報を除いた臨床情報と変異情報にアクセス可能である。既に2025年1月現在で多くの企業を含む118の機関が利用承認済みである。これらのデータは製薬企業にとっても、市場調査・治験デザイン・研究開発など様々な側面で重要な情報となっている。

こうして構築された我が国のがんゲノム医療体制によって、日本の臨床試験・治験がこれまでになく促進されることが期待される。特に、希少ながん種はC-CAT調査結果に臨床試験情報が掲載されることにより日本中の患者が等し

くその情報にアクセスできるようになった。近い将来に血液悪性疾患のがん遺伝子パネル検査も実用化される予定であり、臨床情報を現場の負担少なくC-CATに送る仕組みの開発などによって、世界最先端のがんゲノム医療体制へ展開すると期待される。

令和6年度がん研究シンポジウム

「がんRNA 標的創薬の展望」 開催のご報告



国立がん研究センター
研究所 がん RNA 研究分野
分野長 吉見 昭秀

さる令和7年3月15日土曜日に国立がん研究センター新研究棟・大会議室にて令和6年度がん研究シンポジウムを開催いたしました。令和5年度がん研究シンポジウムでは「次世代の抗がん剤開発」をテーマに活発な議論が行われましたが、今回はその流れを引き継ぐ形で、近年目覚ましい技術的進歩を遂げているRNA創薬の観点から、新しいがん治療法をテーマに取り上げました。この分野の最先端で新しい成果を出されている先生方に演者として現地でご講演をいただくことができ、種々の創薬モダリティにおける病態解明に基づく標的の同定や創薬デザイン・送達技術の開発から実施中の臨床試験の結果まで、幅広いテーマで議論することができました。本シンポジウムのテーマに対する関心の高さの表れか、休日の開催にもかかわらず250名を超える事前登録があり、また企業の方にも多くご参加頂いたシンポジウムとなりました。また本シンポジウムの開催にあたっては、医薬品医療機器総合機構（PMDA）の後援をいただきました。

講演内容のご紹介

がんのRNAを標的とした創薬が、現状でどのように進んでおり、どのような課題が残されているのかを議論するために、素晴らしい演者をお迎えすることができました。

一番目の演者は国立がん研究センター研究所の吉見が務めさせて頂きました。「核酸医薬を用いたがん標的治療法」と題し、核酸医薬、特にアンチセンスオリゴヌクレオチド（ASO）を用いたRNA標的創薬について、スプライシング制御性ASOのデザイン上の問題点やそれを克服する手法、デザインに成功したASOによる



proof-of-concept（POC）の取得について紹介しました。また、Ewing肉腫のドライバー遺伝子におけるRNA修飾によるmRNA安定化メカニズムの解明と、同メカニズム

を標的としたASOのデザイン、機械学習によるDrug delivery system (DDS) の最適化によるPOC取得についてもご紹介しました。

2番目の演者は名古屋大学医学系研究科の鈴木洋先生で、「RNAによるスーパーエンハンサーの制御」についてのご講演でした。RNA、スーパーエンハンサー、転写凝集体が遺伝子発現の高次制御ネットワークを作ることを、物理学的なシミュレーションや、超解像イメージング、ゲノム3D構造解析など、多様な実験的な検証を組み合わせて明らかにされました。例えば、RNAの新生と分解がRNA塩基の電荷の変化を介した転写凝集体の形成、解体の動的なバランスを担うことが見出されました。また、染色体外DNA (Extra-chromosomal DNA: ecDNA) を標的とした治療戦略の展望についてもお話しされました。



3番目の演者は東京大学先端科学技術研究センターの上田宏生先生で、「がんにおけるRNA修飾の網羅的解析」についてご講演されました。RNA修飾は近年非常に大きな注目を集めている研究トピックの一つですが、RNA修飾位置の特定に際して、従来の抗体や質量分析を用いた手法の限界を論じられ、Oxford Nanopore社の長鎖Direct RNAシークエンスデータを元にした修飾塩基の予測ツールであるm6ATM、nanoDOCの開発についてお話しされました。さらに、予測精度を上げるための工夫や



腫瘍細胞株への適用例についてご紹介いただきました。

4番目の演者は、東京科学大学統合研究機構TIDEセンターの程久美子先生にお願いしました。程先生には、「siRNA核酸医薬品開発の現状とがん領域での利用の課題」



と題し、siRNA核酸医薬品の開発状況についてその歴史から近況、そして、いまだsiRNA核酸医薬品が承認されていないがん領域における課題とその解決策について先生のご研究成果を交えてご講演いただきました。正常アレルのがん原遺伝子の機能までも抑制することで副作用が懸念されるというがん領域の課題に対して、1塩基の違いを認識して変異アレルのみをtargetとする次世代型のsiRNA核酸医薬品の開発を進められ、siRNA核酸医薬品のがん領域への実用化の道に期待感が感じられるご講演でした。

5番目の演者は、Chordia Therapeutics 株式会社の森下大輔先生に「骨髄性腫瘍を標的とした新規スプライシングモジュレーターCTX-712の開発」についてご講演をお願いしました。森下先生には、スプライシングを標的とした治療戦略に関する基礎的知見からChordia Therapeutics 株式会社で進められている新規スプライシングモジュレーターCTX-712の開発状況についてご講演いただきました。CTX-712はこれまで開発が進められてきたスプライシング阻害剤とは異なり、スプライシ



ングそのものを抑制するのではなく、exon skippingを起こすスプライシングパターンに変化させるモジュレーターであることが特徴であることをご説明いただきました。臨床試験を進められ、骨髄系腫瘍での有望な結果や、固形腫瘍における適応可能性など、最新の動向をご紹介いただきました。

6番目は、東京科学大学難治疾患研究所の内田智士先生が「がん治療に向けたmRNA創薬」についてご講演されました。mRNA工学を基盤としたがん治療に向けたmRNA



創薬の取り組みとして、がんワクチンにおいては脂質ナノ粒子とPEG（ポリエチレングリコール）組成の最適化により脾臓への指向性を強化できること、またmRNAを「くし型」に修飾することで強力な抗腫瘍効果を誘導できることを示されました。さらに、感染症ワクチンではmRNA単体をジェットインジェクターで皮下に直接投与することにより、副反応を抑制できる可能性があることを明らかにしました。

7番目は、国立がん研究センター先端医療開発センターの中面哲也先生がご講演されました。がんに対するmRNAワクチン療法の開発として、Glypican 3を標的としたペプチドワクチンの臨床開発経験をもとに、がんワクチンの有効性には、がん特異的に発現していること、細胞膜表面に発現していること、不均一性を克服するために複数のがんワクチンを組み合



わせることが重要であることを明らかにしました。さらに、新たに10種類のがん共通抗原を同定し、抗腫瘍効果を評価可能なマウスモデルを樹立することにより、細胞免疫を最大限に誘導するための最適な投与方法および投与条件の同定についてご紹介されました。

最後に

今回はがんRNAを標的とした創薬・RNAを用いた創薬について、病態解明から臨床試験まで大変魅力的な講演内容が揃い、当該分野の研究が今後益々発展していくことを期待させる内容となりました。シンポジウムの最後には、垣添忠生がん研究振興財団会長のご挨拶をいただき、閉会となりました。

「濃密なシンポジウムでした」との声が多く寄せられたこと、演者の先生方同士もお互いの刺激になり、共同研究が始められた先生方がいらっしゃるなどが大変印象的で、オーガナイザー冥利に尽きるシンポジウムとなりました。最後にあらためて、素晴らしいご講演を頂いた演者の先生方、堀田理事長をはじめとするがん研究振興財団のご関係の皆様、ご後援を頂いたPMDAの皆様、そしてご参加いただいた皆様に御礼を申し上げて、本シンポジウムのご報告とさせていただきます。

令和6年度 がんサバイバーシップ研究成果発表会 開催報告



埼玉医科大学 医学部社会医学
教授 亀井 美登里

(がんサバイバーシップ研究成果発表会評価委員長)

令和7(2025)年2月7日(金)に国立がん研究センター研究棟セミナールームにおいて令和6(2024)年度がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナー(現地・オンライン併用)が開催されました。

今年度の参加者は北海道から九州まで各地の医療従事者やがん経験者ご本人、患者会関係者、企業関係者、行政関係者など、その背景は多岐にわたり、皆さんとても熱心に聴講されていました。

本稿では「第1部 がんサバイバーシップ研

究成果発表会」について報告します。

発表会は評価委員会を兼ねておりましたが、がんサバイバーシップに関連する様々な問題について多くの方々と認識を共有したいとの考えから毎回一般の方々にも公開し、研究成果発表会として開催しています。

令和5(2023)年度にがんサバイバーシップ研究助成を行った4課題(4名)の研究成果発表要旨は次のとおりです。

【研究成果発表要旨】(発表順)

1. 長谷川 一男 (NPO法人肺がん患者の会ワンステップ)



「患者の治験・臨床試験情報へのアクセスの実態と課題に関する実態調査」

本研究は、がん患者が治験・臨床試験情報へどのようにアクセスし、どのような障壁があるのかを明らかにすることを目的とした。肺がん患者253名を対象にWEB調査を実施し、情報の主要な取得経路や治験参加に至る過程を分析した。結果、主治医からの情報提供が限られ、患者が自主的に治験情報を探す状況にあることが判明した。特に、治験情報検索サイトの利用率が高いが、単に検索するだけでは治験参加に結びつきにくい。主治医への申し出が治験紹介率を高める要因であることが示唆された。今後、患者が主体的に情報を活用し、適切な意思決定ができる環境整備が求められる。

2. 村瀬 舞 (東京科学大学 生体補綴歯科学分野)



「頭頸部がん患者へのデジタルデンティストリーを応用した支持療法の確立」

顎顔面補綴治療は頭頸部がんの支持療法として重要な役割を果たし、補綴的リハビリテーションにより患者のQOLを大きく向上させることができる。一方で歯科医の中でも限られた認定医や専門医による高難度治療であり、患者のアクセスは困難となっている。頭頸部がん患者へデジタルデンティストリーを応用することで、患者への負担軽減、安全性向上に寄与し、時間的、空間的制限を超えて広い範囲で質の高い補綴治療による支持療法を提供できる可能性が示された。

3. 新垣 理宣 (東北大学病院 周術期口腔健康管理部)



「がんサバイバーを薬剤関連顎骨壊死から守る医科歯科連携および地域連携の支援ツールの開発」

薬剤関連顎骨壊死は難治性であり、骨修飾薬投与開始前からの継続した医科歯科連携が重要である。本研究では、がん治療のために骨修飾薬を使用している患者さん向けに冊子に作成した。前半部分はQ&Aとし、患者さんの疑問が解決できるもの、後半部分は患者さん自身が書き込むことで、病状を伝えることに役立つものを目指した。今後更に多職種や患者さんの意見も取り入れて、アップデートを図る予定である。本取り組みを通じて、医歯薬連携・病診連携の推進に繋がれば幸いである。

4. 丸 光恵 (兵庫県立大学看護学部 小児看護学)



「AYA世代がん患者・サバイバーが体験するMicroaggressionの実態調査」

アンケートの回答者は25名、インタビューは22名にご参加いただきました。典型的なマイクロアグレッションは「無礼で気遣いのないコミュニケーション」と、「ひとくくりにして問題がない事にする」で、発信者側に悪意はありませんでした。その為、受け手側は「もやもやする」ものの、「気にしない」でやり過ごしていました。いずれもAYA世代がんに関する知識不足と、当事者の経験を過少評価したためと思われました。メディアや医療者をはじめとして、AYA世代がんとマイクロアグレッションに関する啓発の必要性が認められました。

近年、がんの療養とこれに続く人生において直面する様々な課題について、患者自身と患者を取り巻く周囲の方々が手を携えて乗り越えていこうとする“サバイバーシップ”の充実を大切にしたいという動きが広く普及してきました。

平成26（2014）年度から始まった「がん研究10か年戦略」には、研究テーマの一つとして「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築をめざした研究」が位置づけられ、令和5（2023）年度から実施されている第4期がん対策推進基本計画においても、引き続き「がん患者等の社会的な問題への対策（がんサバイバーシップ支援）」を掲げられたことが大きな推進力となっています。

がん研究振興財団では、こうした動きをいち早く捉えて平成27（2015）年度から「がんサバイバーシップ研究支援事業」を開始して毎年多

くの研究テーマに応募いただいております。

本稿では第9年次目にあたる令和5（2023）年度に採択された研究の成果をご紹介します。

これまでの研究成果として、患者団体やNPO活動の活性化が図られたほか、がんサバイバーの食生活を支える簡便なレシピ集の発刊に結びつく等、様々な成果物が得られております。

今年度の研究成果発表では、患者の治験・臨床試験情報へのアクセスの実態と課題、がんサバイバーを薬剤関連顎骨壊死から守るツールの開発、AYA世代がん患者・サバイバーが体験するMicroaggressionの実態調査など幅広い分野にまたがる多様な研究内容が報告されました。この中から、今後のがんサバイバーの皆さんに有用な知見、成果物が誕生することを切に願っております。

令和6年度

がんサバイバーシップ研究セミナー開催報告

～がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき～



NPO 法人日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事
岩手医科大学客員教授、東京慈恵会医科大学客員教授

高橋 都

1. 今年度の企画にあたって

令和7年2月7日、令和6年度「がんサバイバーシップ研究セミナー」が、国立がん研究センター研究棟セミナールームにおいてハイブリッド開催されました。本セミナーでは毎回さまざまな切り口からがんサバイバーシップについて議論をし、理解を深めています。

今年度のテーマは「がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき」。がん診断は患者や家族の社会生活に多大な影響を及ぼしますが、にもかかわらず、病い体験を活かして社会貢献をしている方が大勢おられます。同病者の支援、研究への協力、がん教育、一般市民への発信など、さまざまな場面で自らの体験を活かしたいと思ったきっかけや、活動を通じて感じる課題などを率直に語り合おうという趣旨で企画されました。

当日は会場約30人、オンライン約200名の参加があり、質疑応答も極めて活発で有意義な会となりました。また、セミナーは厚生労働省の後援を得るとともに、健康・生活衛生局がん・疾病対策課鶴田課長のご参加もいただきました。本稿では当日の概要について報告します。

2. 【講演1】河田純一氏 東京大学医科学研究所公共政策研究分野 特任研究員 「がん研究におけるPPI（患者・市民参画）：なにができるかを考えよう」

河田氏からは、PPI/E（Patient Public Involvement / Engagement）の必要性や理念、国内外の歴史的経緯や政策における位置づけ、さらに教育リソース等が紹介されました。国内のがん研究におけるPPI/Eの展開については、それが単に国からの要請ではなく、推進を求める患者の声が反映された結果であり、当事者と「共に」



作られてきた政策であることが強調されていました。

3.【講演2】彦田かな子氏 一般社団法人LINKOS共同代表 「学校での『がん教育』と図書館での『みんなのがん教室』」

彦田氏は、学校と図書館におけるがん教育の実践を報告されました。学校や図書館は公共性が高く適度に社会とつながれること、そのような場所で自身の経験を話すことで辛かったことがプラスに転じること、さらに、参加者の受信力を信じ、教員や子どもたちと一緒に活動することで安心感や強さが得られることに言及されました。



4.【講演3】高橋智子氏 一般社団法人がんサーペアレンツ理事 「つながりは、生きる力になる。～想いの循環・つながりの連鎖から生まれる『お互いさま』の社会に向かって～」

高橋氏は、子どもをもつがん患者のオンラインコミュニティ「がんサーペアレンツ」を紹介し、同じ境遇の人とつながり、子育て世代の「経験したからこそその声」をがんへの先入観が残る社会に届け、生きやすい社会を実現するという同団体のコンセプトについて話されました。また、団体は参加者に何かを提供するというより、つながりを通じて参加者が何かを始めるきっかけを得る場所であることや、団体設立者が逝去されたあとの活動精神の承継や発展にも触れられました。



5.【講演4】野田真由美氏 NPO法人支えあう会「α」副理事長 「がん患者・遺族として思いのバトンを繋いでいく」

野田氏は、がん経験者・家族の立場から、わかりやすい情報や患者交流の必要性を実感し、インターネット上で得た情報や患者グループに助けられた経験を話されました。治療が一段落した後にピアサポーター等の活動を始めたことは、支えてくれた人の「思いのバトンを繋ぐ」活動でもありました。その後臨床研究審査やガイドライン委員など活動の幅が広がる中、会議での「作法」や「個」と「公」のバランス、さらに急速に高まる「患者参画」のニーズに患者側の準備が追いついていないのか、その懸念にも言及されました。



6.【講演5】西舘澄人氏 NPO法人GISTERS理事長 「余命わずかと言われた希少がん患者家族が患者会運営者になった理由」

西舘氏はGIST患者家族の立場から、インターネット上の情報交換や海外患者会との交流によって支えられた経験、そして納得のいく治療選択のためには患者自身も専門的知識を学んで経験を伝えていく必要性について話されました。参加者のニー



ズにもとづいて、あらゆるコミュニケーションツールを用いた活動を展開し、今後もドラッグロスの解消や治験情報へのアクセス向上に向けて、情報プラットフォーム構築や医療機関との連携強化を進めていく予定です。

7. まとめ

今回のセミナーでは、期せずして「つながりの力」「支えられたことへの恩返し」というキーワードが浮上し、現在の活動の原動力となっていることがうかがわれました。セミナー終了後もスピーカーの方々の周囲に聴衆が集まり話の輪ができていたことが印象的でした。五名のスピーカーのみなさまの一層のご活躍と、活動のご発展を祈念申し上げます。

本セミナーは、がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会における議論をもとに、具体的な企画や人選にご協力くださった若尾文彦先生、中川原章先生はじめ、委員会の先生方のご支援で実現したものです。関係者のみなさまに、深く御礼申し上げます。



令和6年度 事業実績

- 1. がん情報提供支援事業運営委員会報告 …… 16
委員長 上田 龍三
- 2. がん研究助成審議会報告 …………… 19
委員長 村上 善則
- 3. HOPE事業等運営委員会報告 …………… 26
委員長 村上 善則
- 4. がんサバイバーシップ
研究支援事業運営委員会報告 …………… 29
委員長 亀井 美登里
- 5. 海外派遣研究助成委員会報告 …………… 32
委員長 菅野 純夫
- 6. 看護師・薬剤師・技師等
海外研修選考委員会報告 …………… 38
委員長 桑原 節子

がん情報提供支援事業運営委員会報告

委員長

上田 龍三 (名古屋大学 特任教授)

令和3年10月に当財団HP上に開設した“患者本位の「がん治験情報サイト」”につきましては、①信頼できる最新の治験情報の提供、②がん患者・家族にも理解可能な平易な表現、③作用機序等の追加情報の提供等をコンセプトに運用し、令和5年度までに全がん種（領域）の企業治験情報の登録を完了する一方、医療機関ごとの企業治験情報の検索が可能となる「総合検索情報システム」機能を追加しました。

さらに、令和6年度にはサイトレイアウトを全面リニューアルすると共に、①小児・AYA世代など企業治験数の少ない領域での医師主導治験情報等の提供、②フリーワード検索機能の搭載による検索の効率化、③用語集やリンク集の充実等、一層の機能拡充を図ったところです。

こうした検索機能の向上に伴い当サイトへのアクセス数も着実に増加し、直近のデータでは毎月約3万件的延べアクセス件数を記録（実アクセス人数は約3千人／月）し、がん患者・家族等に幅広く活用されている状況がうかがえます【グラフ参照】。これにより患者が身近な医療機関で治験に参加する機会が増大し、治験症例数の確保、承認申請の迅速化が図られることで、新薬の市場投入の促進及び多くのがん患者にとっての治療選択肢の拡大も期待できるものと考えます。委員会では、専門医と企業のご協力をいただき科学性、倫理性を検証した上で編集致しております。本事業により、日本での治験が患者さんや担当医師により正しく理解され、より潤滑に進む一助になればと念じております。

本稿では、令和6年度のがん情報提供支援事業の実績及び令和7年度事業計画について報告します。

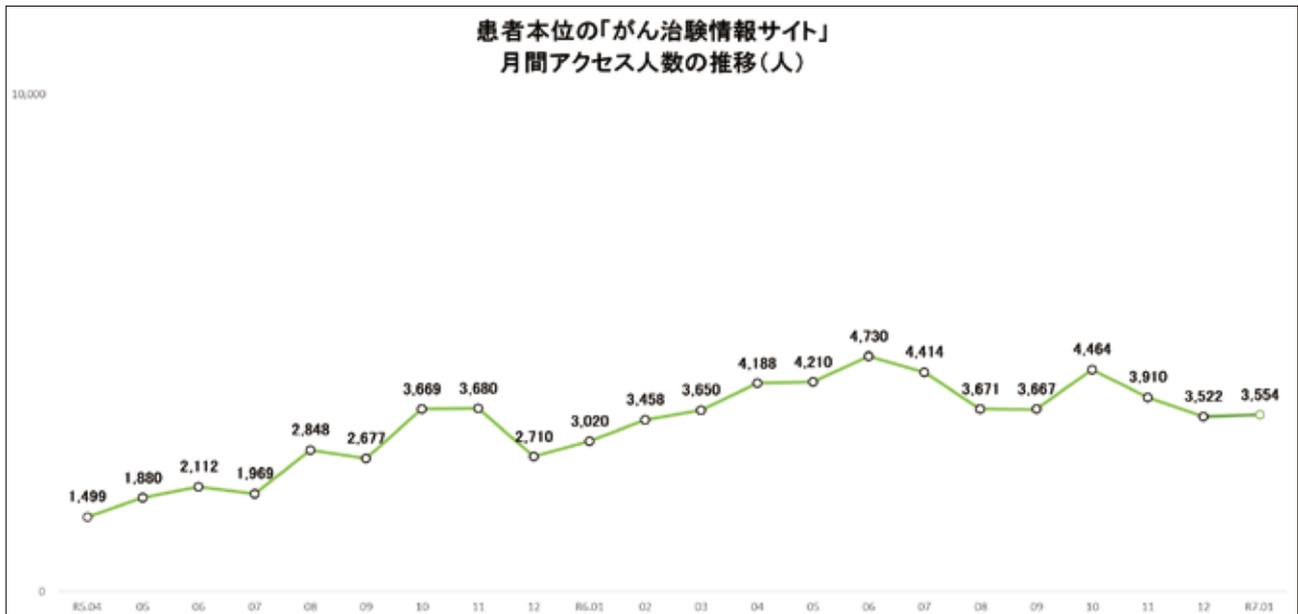
I. 委員会開催状況

1. がん情報提供支援事業運営委員会合同会議

- (1) 第1回開催 令和6年 5月31日 審議
- (2) 第2回開催 令和6年 11月26日 審議

2. 患者本位の「がん治験情報サイト」企業説明会開催 令和7年3月26日

- (1) 患者本位の「がん治験情報サイト」の全面リニューアルについて
 - ・サイトレイアウトの全面更新
 - ・小児/AYA世代のがん等、企業治験数の少ない領域における医師主導治験や特定臨床研究情報の掲載
 - ・フリーワード検索機能の搭載による、ゲノム情報関連治験や拡大治験等に関する情報へのアクセスの迅速化
- (2) 令和7年度事業計画について
 - ・事業方針案
 - ・サイト情報の更新計画案
- (3) 患者団体によるがん情報サイトの評価について



Ⅱ. 令和6年度事業実績

1. 患者本位の「がん治験情報サイト」定期更新

- 令和6年 5月 8日 第1期公表
- 令和6年 8月 28日 第2期公表
- 令和6年 11月 15日 第3期公表
- 令和7年 2月 18日 第4期公表

2. 患者本位の「がん治験情報サイト」システムの開設・広報活動

- 令和6年 6月 10日 小児 AYA の医師主導・特定臨床研究公表
- 令和6年 7月 24日 用語集ページの実装
- 令和6年 9月 3日 サイト名称の改定、協力企業一覧の掲載
- サイトレイアウトの全面更新

- 令和6年 9月17日 全がん連加盟団体を中心に患者会へPR活動
- 令和6年10月 7日 全国がん診療連携拠点病院・都道府県へPR活動
- 令和6年10月25日 フリーワード検索機能の実装
- 令和6年11月15日 リンク集ページの実装

3. 患者本位の「がん治験情報サイト」活動実績（2025年1月現在）

- 令和6年度アクセス総数 約36万件
- 令和6年度情報改訂回数 約100回

Ⅲ. 令和7年度事業計画

1. 患者本位の「がん治験情報サイト」運営事業実施計画

①基本情報システム

- ・全がん種の企業治験情報の定期的な更新（4半期単位）

②総合検索情報システム

- ・小児がん・AYA世代のがんに関する医師主導治験及び特定臨床研究情報の定期的な更新（2か月単位）
- ・患者団体等のサイトユーザーや治験実施企業からの要望に対応した検索システムの充実強化

2. 予算額 計 2,200万円

- | | |
|---------------|---------|
| ①人件費（4名分） | 1,500万円 |
| ②委員会経費 | 100万円 |
| ③システム管理費 | 200万円 |
| ④検索システム開発・運営費 | 300万円 |
| ⑤事務経費 | 100万円 |

がん研究助成審議会報告

委員長

村上 善則（日本医科大学先端医学研究所 特命教授）

1. がん研究助成事業について

がん研究助成審議会における審議概要について報告します。

がん研究助成金は、当財団の設立当初から、がん研究の進歩・発展に貢献することが期待される研究に対し実施している事業であり今年で57回目となりました。

このがん研究助成金は、当財団の事業にご理解をいただいた一般の方々からの御芳志を財源としており、貴重なご寄付に感謝申し上げます。

今年度のがん研究助成審議会は、令和7年1月14日に開催しました。

審議会委員の村上善則（委員長）、牛島俊和、坂本亨宇、藤田直也、（敬称略）の4名及びがん研究振興財団堀田理事長が出席し、令和6年度がん研究助成金交付者の最終選考が行われました。

研究助成金 A 課題は、わが国でがん研究に従事している日本人研究者の個人またはグループが対象で、一課題100万円以内で助成金交付数は20件としています。108件の申請があり、各委員による事前評価を踏まえて個別に評価した結果、20件が確定されましたが、その後1件が辞退となりました。（別掲採択者19名）

また、B課題は看護師、薬剤師、技師（放射線・検査等）、管理栄養士、放射線医学物理士、臨床心理士等を対象とし、一課題50万円以内で助成金交付数は5件としています。25件の申請があり、各委員による事前評価を踏まえ個別に評価した結果、5件が確定されました。（別掲採択者5名）

2. がん研究助成審議会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の4名により構成されています。（五十音順）

牛島 俊和（星薬科大学 学長）

坂元 亨宇（国際医療福祉大学 医学部長／慶応義塾大学 名誉教授）

藤田 直也（公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター所長）

村上 善則（日本医科大学先端医学研究所 特命教授）

[A 課題]

| | 氏名 | 所属機関 | 研究課題名 |
|----|--------|----------------------|--|
| 1 | 細川 健太郎 | 九州大学大学院医学研究院 | 造血器腫瘍微小環境の変容に対するテロメア保護因子の機能解明 |
| 2 | 谷本 梓 | 金沢大学がん進展制御研究所 | 小細胞肺癌における DLL3 二重特異性 T 細胞誘導 (BiTE) 抗体に対する治療抵抗性の解明とその克服 |
| 3 | 山内 翔太 | (公財)がん研究会がん研究所 | 腫瘍微小環境での細胞老化における脂質代謝の役割 |
| 4 | 廣野 誠子 | 兵庫医科大学 | 遺伝子変異解析から導いた膵管内乳頭粘液性癌に対する個別化治療の開発 |
| 5 | 山本 恵介 | 東京大学医学部附属病院 | 膵癌肝転移における代謝クロストークの解明と治療標的化 |
| 6 | 西辻 和親 | 和歌山県立医科大学 | 患者由来がんスフェロイド培養系を用いた変異型 p53 凝集体形成による p53 機能喪失及び発がん促進機能獲得機構の解明 |
| 7 | 牧瀬 尚大 | 千葉県がんセンター | ナノポアシーケンサーを用いた希少がんに対する統合病理診断 |
| 8 | 野村 昌志 | 東京大学医学部附属病院 | ナノポア DNA メチル化シーケンスによる神経膠腫の術中悪性度診断 |
| 9 | 山岸 良多 | 大阪公立大学大学院 | 運動による時計遺伝子 CRY2 誘導を介した肝がん治療法の開発 |
| 10 | 林 嘉宏 | 立命館大学 | がん悪液質の発症にかかわるがん微小環境因子の同定と治療応用 |
| 11 | 北嶋 洋志 | 札幌医科大学 | 非コード RNA の短い ORF から翻訳される大腸がん関連マイクロプロテインの同定と治療標的としての有効性評価 |
| 12 | 浅田 健 | 国立研究開発法人理化学研究所 | 肺腺がん選択的アイソフォーム発現と特異的プロモーター活性制御機構の解明 |
| 13 | 横田 貴史 | 大阪国際がんセンター | 新しく同定した RNA スプライシング因子の変異が急性骨髄性白血病を誘発する分子機構の解明 |
| 14 | 刀坂 泰史 | 静岡県立大学 | がん関連線維芽細胞におけるアルギニンメチル化酵素の機能解析 |
| 15 | 榎本 将人 | 福井大学 | がん発生・悪性化を抑える組織領域の形成機構の解析 |
| 16 | 紅林 泰 | 慶應義塾大学 | 進行肝細胞癌の免疫ゲノム学的全体像の解明と実臨床への応用 |
| 17 | 松井 崇浩 | 大阪大学 | 組織常在性マクロファージを介した早期がん病変検出法の開発 |
| 18 | 高橋 良太 | 東京大学医学部附属病院 | 膵前癌病変における腫瘍内不均一性の解明と腫瘍進展抑制への応用 |
| 19 | 村田 憲治 | 札幌医科大学医学部附属研究所免疫学研究所 | 骨軟部肉腫における免疫応答の解明と新規免疫療法の開発 |

[B 課題]

| | 氏名 | 所属機関 | 研究課題名 |
|---|--------|----------------|--|
| 1 | 高山 佳樹 | 神奈川県立がんセンター | 粒子線治療における体厚変動に適応した治療システムの開発と臨床応用 |
| 2 | 塩月 絵美香 | 大阪国際がんセンター | 府域で勤務する訪問看護師ががん看護実践で必要と感じることの実態調査研究 |
| 3 | 山下 修司 | 岐阜薬科大学 | 免疫チェックポイント阻害薬の有効性及び安全性に関する多施設共同時間薬理学研究 |
| 4 | 高尾 鮎美 | 大阪公立大学看護学部 | 認知症を併存するがん患者の地域での療養生活を支える看護師間の望ましい連携 |
| 5 | 水野 統文 | 埼玉医科大学総合医療センター | 呼吸同期放射線治療の照射精度および効率化に資する公開可能な汎用音声ガイドプログラムの開発 |

A課題 (19名)

細川 健太郎 ●九州大学大学院医学研究院



研究課題名

造血器腫瘍微小環境の変容に対するテロメア保護因子の機能解明

研究内容

急性骨髄性白血病(AML)細胞は正常な骨髄微小環境(ニッチ)を変容させ、自らの維持および増殖に有利な環境を作ることが知られています。一方でどのような分子の変化が元になってAMLの支持基盤が構築されるのかについては不明な点が多く残されています。そこで本研究では、AMLマウスモデルを用い、変容したニッチ細胞におけるテロメア結合因子Pot1aの機能を詳細に解析することで、AMLの支持基盤を明らかにすることを目指します。

谷本 梓 ●金沢大学がん進展制御研究所



研究課題名

小細胞肺がんにおけるDLL3二重特異性T細胞誘導(BiTE)抗体に対する治療抵抗性の解明とその克服

研究内容

近年、小細胞肺がん(SCLC)に対する新たな免疫療法として開発された二重特異性T細胞誘導(BiTE)抗体tarlatamabは、DLL3とCD3に結合しT細胞を活性化させる。第II相試験では高い奏効率を示し、日本でも承認申請がなされた。しかし、一部の患者で効果が乏しく、耐性メカニズムの解明が課題である。本研究では、マウスのBiTE抗体を用いた同種移植モデルを構築し、治療効果と耐性機構を解析する。これにより、tarlatamabの治療抵抗性因子を明らかにし、SCLC患者の予後改善に貢献することを目指す。

山内 翔太 ●(公財)がん研究会がん研究所



研究課題名

腫瘍微小環境での細胞老化における脂質代謝の役割

研究内容

細胞老化は前がん細胞の増殖を防ぐがん抑制機構として知られている。一方で、腫瘍微小環境中の老化間質細胞は抗腫瘍免疫を抑制することが知られ、近年治療標的として注目されている。しかしながら、生体内における細胞老化の誘導メカニズムには未だ不明な点が多い。我々は、脂肪酸酸化(脂肪を原料としたミトコンドリアエネルギー代謝)が、細胞老化の誘導に関与することを見出している。そこで本研究では、細胞老化誘導における脂肪酸酸化の役割を明らかにし、新たながん予防法や治療法の開発に繋げることを目的とする。

廣野 誠子 ●兵庫医科大学



研究課題名

遺伝子変異解析から導いた膵管内乳頭粘液性癌に対する個別化治療の開発

研究内容

本研究は、膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMN)由来浸潤癌の原発巣と再発組織の遺伝子変異解析とctDNA変異解析のモニタリングにより、IPMN由来浸潤癌に対する切除後再発の早期診断と新規治療の標的になり得る遺伝子変異を同定することを目的とする。さらに、IPMN由来浸潤癌から採取した組織から癌オルガノイドを樹立し、治療標的候補分子に対する特異的阻害薬の効果を評価する。本研究が遂行できれば、IPMN由来浸潤癌患者のprecision medicineに沿った治療の提供に貢献できる可能性がある。

山本 恵介 ●東京大学医学部附属病院



研究課題名

膵癌肝転移における代謝クロストークの解明と治療標的化

研究内容

膵癌は強い線維化を伴った乏血性の腫瘍を形成するため、その内部は非常に高度な低栄養状態に陥っている。申請者は、膵臓原発巣腫瘍内において、膵癌細胞が様々な間質細胞から供給される代謝産物に依存して生存していること、こうした癌細胞と間質細胞の代謝クロストークを阻害することで、膵癌の進展を抑制できる可能性があることを報告してきた。本研究では、進行膵癌患者の多くが罹患する肝転移巣において、膵癌細胞がどのような間質細胞とどのような代謝産物の交換を行っているのかを明らかにし、その機序を解明することで、新規治療法の開発を目指す。

西辻 和親

●和歌山県立医科大学



研究課題名

患者由来がんスフェロイド培養系を用いた変異型 p53 凝集体形成による p53 機能喪失及び発がん促進機能獲得機構の解明

研究内容

我々は変異型 p53 がアミロイド線維様の凝集体を形成することに着目し、p53 凝集体の硫酸化糖鎖依存的な伝播機構を解明し、p53 凝集体の存在がいくつかの癌において予後不良因子であることを報告した。しかしながら、p53 凝集体が癌病態に関与する詳細なメカニズムは不明である。本研究では、生体でのがん細胞の特性を強く反映する患者由来がんスフェロイド培養系のトランスクリプトーム解析により、p53 凝集によるがん抑制機能喪失と発がん促進機能獲得の詳細を明らかにする。

牧瀬 尚大

●千葉県がんセンター



研究課題名

ナノポアシーケンサーを用いた希少がんに対する統合病理診断

研究内容

希少がんの病理診断は難しいです。例えば肉腫専門と非専門の病理医の間では約8%の症例で重大な不一致が起こります。診断の不一致の原因として遺伝子検索へのアクセスの悪さが挙げられます。これを解決するために、私は小型、安価、簡便、迅速なナノポアシーケンサーに着目しました。腫瘍DNAから、一塩基変異、融合遺伝子、コピー数変化、DNAメチル化を数日で同定できます。検体の処理からデータ解析までの手法を確立、日常病理診断へ導入し、だれでも、どこでも、どんな組織型でも、希少がんに対する迅速かつ正確な病理診断を目指します。

野村 昌志

●東京大学医学部附属病院



研究課題名

ナノポアDNAメチル化シーケンスによる神経膠腫の術中悪性度診断

研究内容

IDH変異を有するびまん性神経膠腫は低悪性度腫瘍から高悪性度腫瘍へと経時的に進化していきます。悪性度によって術後治療法の選択が異なりますが、病理診断による悪性度が決定するまでに術後1週間程度要するのが一般的です。本研究では最新のナノポアシーケンス技術を用いることにより、これまでの研究でIDH変異神経膠腫の悪性化との強い相関が示されてきたDNAメチル化を術中に解析することにより現時点での腫瘍の悪性度を正確に把握し、摘出目標に反映させるための手法を構築することを目標とします。

山岸 良多

●大阪公立大学大学院



研究課題名

運動による時計遺伝子CRY2誘導を介した肝がん治療法の開発

研究内容

本研究は、近年増加の一途を辿っている肥満関連性肝がんに対し、運動による腫瘍抑制機構を解明し、新規治療法開発へと繋げることを目的とする。我々は先行研究において、規則的な運動が肝がんモデルマウスで腫瘍形成を抑制することを確認している。またそのメカニズムとして、運動時に増加した時計遺伝子CRY2がc-MycおよびE2F1といったがん促進因子をプロテアソームにより分解し、腫瘍形成を抑制する可能性を見出している。本研究では、このCRY2の誘導法を探り、運動による抗腫瘍効果を模倣した治療法の開発を目指す。

林 嘉宏

●立命館大学



研究課題名

がん悪液質の発症にかかわるがん微小環境因子の同定と治療応用

研究内容

がん悪液質は、著しい筋組織の減少と炎症を特徴とする症候群です。進行がん患者の80%でみられ、がんによる死因の30%を占めます。最近、私たちは、様々ながん種において出現し悪液質病態を誘導する新規単球サブセット(Cachexia-inducible Monocytes, CiM)を見出しました。本研究では、CiMに着目し、その制御に関わるがん微小環境因子を時空間的に解析することにより、がんの進行とそれに伴って発症するがん悪液質病態との関係性を基盤的に理解することを目指します。

北嶋 洋志

●札幌医科大学



研究課題名

非コードRNAの短いORFから翻訳される大腸がん関連マイクロプロテインの同定と治療標的としての有効性評価

研究内容

ゲノム解析の遺伝子予測では、タンパク質のオープンリーディングフレーム(ORF)を予測する上で精度の問題から300塩基以下の短いORFは対象から外されてきました。近年のリボソームプロファイリングやプロテオームの解析技術の発展により、短いORFから翻訳されるマイクロプロテインの存在が明らかになりました。これまでの解析から、私たちは大腸がんで非コードRNAがコードする可能性のある22個のマイクロプロテインを得ました。本研究ではマイクロプロテインの病理的な意義を明らかにし、新規治療法の開発を目指します。

浅田 健

●国立研究開発法人 理化学研究所



研究課題名

肺腺がん選択的アイソフォーム発現と特異的プロモーター活性制御機構の解明

研究内容

申請者らはこれまでにゲノム・エピゲノム・トランスクリプトームデータを統合したマルチオミックス解析から、日本人肺腺がんのがん分子メカニズムを明らかにしてきました。近年、遺伝子発現解析ではなく、アイソフォーム発現解析から、アイソフォーム依存的な生存予後や薬物応答性が見出されています。本研究では従来のマルチオミックス解析に加えて、アイソフォーム発現レベルでの発現解析を行い、プロモーター活性・エンハンサー活性・アイソフォーム発現の制御機構解明から、詳細ながん分子メカニズム解明を目指します。

横田 貴史

●大阪国際がんセンター



研究課題名

新しく同定したRNAスプライシング因子の変異が急性骨髄性白血病を誘発する分子機構の解明

研究内容

RNAスプライシングの分子機構とその異常による悪性腫瘍の発生は近年大きく注目されており、世界中で精力的に解析が行われている。申請者らは、独自に作製した変異胚性幹細胞から、これまで未解析の造血関連遺伝子を同定した。解析の結果、その遺伝子がコードする蛋白がRNAスプライシングの制御を介して造血に重要な役割を果たしていること、その変異はヒト急性骨髄性白血病症例で検出されることがわかった。本研究では、この遺伝子の変異が白血病発症を誘導する分子機構を解明し、血液癌に対する新しい制御方法の開発につなげたい。

刀坂 泰史

●静岡県立大学



研究課題名

がん関連線維芽細胞におけるアルギニンメチル化酵素の機能解析

研究内容

がんの間質にはがん関連線維芽細胞(CAF)とよばれる細胞群が存在し、CAFはがん細胞にとって有利な微小環境を構築することに寄与している。CAFの活性化を抑制する治療の開発が進んでいる。これまでにアルギニンメチル化酵素PRMT5が線維芽細胞の活性化に重要であることを示した。しかし正常線維芽細胞からCAFへの活性化におけるPRMT5の機能とメチル化反応を介した活性化メカニズムは不明である。そこで本研究はCAFにおけるPRMT5の機能を明らかにすることを目的としている。

榎本 将人

●福井大学



研究課題名

がん発生・悪性化を抑える組織領域の形成機構の解析

研究内容

がんの発生部位には組織領域の特異性があり、組織の中には「がん化しやすい場所」と「がん化しにくい場所」が存在します。しかし、組織領域の不均一性によるがんの発生制御の仕組みはいまだ不明な点が多いのが現状です。私たちは最近、ショウジョウバエ上皮がんモデルを用いた解析から、悪性腫瘍の発生が著しく抑制される組織領域を発見しました。そこで本研究では、悪性腫瘍の発生を抑制する組織微小環境の形成に関わる分子実体、細胞の性質とその制御機構を明らかにすることで、新しいがん抑制システムの基本原理の理解を目指します。

紅林 泰

●慶應義塾大学



研究課題名

進行肝細胞癌の免疫ゲノム学的全体像の解明と実臨床への応用

研究内容

進行肝細胞癌の治療前生検検体は稀少であるため、その病理組織学的、分子生物学的所見ならびに腫瘍微小環境に関しては不明な点が多い。本研究では、多施設共同研究により収集した有数の規模の進行肝細胞癌治療前生検検体コホートを用いて、進行期に特徴的な遺伝子変異や分子生物学的性質について検討し、病理組織学的所見および腫瘍微小環境の特徴との関係について検討する。また、治療後経過と比較することで、治療法の選択につながる治療効果予測因子の確立ならびに治療抵抗性を示す機序の解明を目指す。

松井 崇浩

●大阪大学



研究課題名

組織常在性マクロファージを介した早期がん病変検出法の開発

研究内容

がん組織は腫瘍細胞以外にも多種多様な細胞が混在する複雑な微小環境を形成しており、免疫細胞などの多彩な細胞が腫瘍の進展や抑制などの制御に関わっている。本研究ではその中から、骨髄由来の単球・マクロファージと異なる細胞由来とされる組織常在性マクロファージに着目し、非腫瘍下での生理的な環境と担がん状態における微小環境でのフェノタイプの差異を解析する。がんの有無やその進展に伴う着目細胞の生物学的変化を検出し、組織常在性マクロファージを介した早期がん検出法の開発を目的とする。

高橋 良太

●東京大学医学部附属病院



研究課題名

膵前癌病変における腫瘍内不均一性の解明と腫瘍進展抑制への応用

研究内容

膵癌の発癌機序について、これまでの遺伝子改変マウスを用いた検討により膵腺房細胞に由来する前癌病変を経た発癌経路が示唆されている。均一な細胞集団に見える膵腺房細胞の中には前癌病変を形成しやすい性質を持つ起源細胞の存在が報告されている。本研究ではこの起源細胞を含む腺房細胞からの腫瘍形成機序について詳細に検討を加え、膵癌及び前癌病変における腫瘍内不均一性と各細胞集団の機能の違いや、それをもたらす因子について明らかにすることで、膵癌の発生進展を制御する新規治療法の開発を目指す。

村田 憲治

●札幌医科大学医学部附属研究所免疫学研究所



研究課題名

骨軟部肉腫における免疫応答の解明と新規免疫療法の開発

研究内容

骨軟部肉腫は、若年者に発症することが多く、特に化学療法不応例の予後は不良であるため、新規治療法の開発が求められている。腫瘍浸潤 Tリンパ球(TIL)が認識する抗原は、免疫療法の治療標的として有望である。一細胞解析の普及により、腫瘍組織からTILを分離して直接的に腫瘍反応性T細胞受容体(TCR)を単離することが容易となったが、認識抗原の同定ははまだ難渋する。本研究では、一細胞解析により肉腫 TILに含まれる肉腫反応性 TCRを単離し、新技術を用いて TCRが認識する有望な肉腫抗原を同定して、新規免疫療法を開発する。

B課題 (5名)

高山 佳樹

●神奈川県立がんセンター



研究課題名

粒子線治療における体厚変動に適応した治療システムの開発と臨床応用

研究内容

がん治療の中でも、重粒子線治療は高精度にがん細胞を狙う先進的な治療法として期待されている。しかし、治療期間中に体重が変化すると、照射の正確性が低下することが課題だった。本研究では、患者の体の変化に柔軟に適応できる新しい技術を開発する。これにより、治療の精度を維持しながら、より多くの患者が安心して重粒子線治療を受けられるようになる。この研究が進めば、がん患者の負担を減らし、より確実に効果的な治療の実現に貢献できると考えている。

塩月 絵美香

●大阪国際がんセンター



研究課題名

府域で勤務する訪問看護師ががん看護実践で必要と感じることの実態調査研究

研究内容

がん患者は治療中や看取りの段階で自宅や地域に帰り療養生活を送っており、訪問看護師が地域のがん看護を担っている。大阪府がん診療連携協議会がん看護部会では、専門性の高い看護師の育成と看護の質の均てん化が課題と考えているが、地域のがん看護実践や学習は、事業所や訪問看護師個々の裁量に委ねられており、訪問看護師が、がん看護を実践する上で何が必要かは詳らかでない。そこで、府域で勤務する訪問看護師を対象に、がん看護を実践するうえで必要と感じていることを明らかにすることを目的としている。

山下 修司

●岐阜薬科大学



研究課題名

免疫チェックポイント阻害薬の有効性及び安全性に関する多施設共同時間薬理学研究

研究内容

ヒトの体内時計の周期は、約24時間周期のリズムによって制御されており、薬剤投与後の薬物動態にも影響を与えることが知られている。免疫チェックポイント阻害薬(ICI)においては、投与タイミングにより有効性に差がある可能性が指摘されている。しかし実臨床においてICIの投与タイミングに関する規定はなく、時間薬理学的観点とは異なる要因によって患者への投与時間が設定されることが多い。本研究では、患者QOL及び治療成績の向上を目指したICI投与设计法を明らかにすることを目的とする。

高尾 鮎美

●大阪公立大学看護学部



研究課題名

認知症を併存するがん患者の地域での療養生活を支える看護師間の望ましい連携

研究内容

がんと認知症は加齢に伴い発症率が増加する疾患で、がん患者が認知症を併存する割合は今後ますます高くなる。認知症を併存するがん患者は、BPSD(行動心理症状)予防の観点から、がんの症状が緩和され安寧を保ちながら、住み慣れた自宅や療養施設での生活を続けられることが望ましい。本研究では、認知症を併存するがん患者の症状緩和や意思決定を支えるケアを切れ目なく提供するために、生活を支える看護師の視点で、がん診療拠点病院と在宅療養機関の望ましい看護連携について明らかにすることを目的とする。

水野 統文

●埼玉医科大学総合医療センター



研究課題名

呼吸同期放射線治療の照射精度および効率化に資する公開可能な汎用音声ガイドプログラムの開発

研究内容

近年、呼吸同期法を用いた放射線治療により、照射タイミング・範囲を限定することで、放射線肺臓炎等の副作用発生頻度の低減が期待されている。一方、当該技術の治療時間の長さや手技の煩雑さから、適応患者数が制限される場合も多く、その恩恵を全ての患者が享受出来ていないわけではない。本研究では、その精度担保および効率的実施に資するために、ソフトウェア音声で患者呼吸タイミングを誘導可能な、汎用音声ガイドプログラムの開発を行う。当該技術の多くの患者への提供および関連医療スタッフの負担軽減を図ることを目的とする。

HOPE事業等運営委員会報告

委員長

村上 善則（日本医科大学先端医学研究所 特命教授）

1. がんになっても生きる希望を持てる事業（HOPE事業）について

がん研究を担う人材育成については、これまで、がんの本態解明を目指した政府の「対がん10か年戦略(1次～3次)」の推進に当たり、当財団の「若手研究者育成事業（リサーチ・レジデント制度）」が30年に亘り大きな役割を果たしてきました。

この事業は、平成27年度からAMEDに移管され、科学研究費の一部として助成されています。さらに同年からがん研究振興財団の新たな事業として、若手の上級研究者の育成を目的としたシニア・リサーチフェロー研究助成を令和3年度までの7年間に亘り実施し、39名の方に助成してきました。

然しながら、MDの応募者が減少傾向にある一方、がんの本態解明の基礎研究から得られた成果を活用し、臨床応用を目指した研究の加速化が求められていることから、がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、研究の成果を臨床につなぐ「トランスレーショナル・リサーチ（TR）」を展開する若手研究者を育成することを目的に、「TR研究奨励助成金」を令和4年度から新たに実施しています。

令和6年度の対象となる研究領域は、

- A 「がんの予防」に関する研究
- B 「がんの診断・治療」に関する研究
- C 「がんとの共生」に資する研究
- D ライフステージやがんの特性に着目した研究
- E がんの予防、がんの診断・治療の開発、がんとの共生を促進するための分野横断的な研究となっています。

2. HOPE事業等運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の5名により構成されています。（五十音順）

牛島 俊和（星薬科大学 学長）

坂元 亨宇（国際医療福祉大学 医学部長／慶応義塾大学 名誉教授）

菅野 純夫（一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事）

藤田 直也（公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター所長）

村上 善則（日本医科大学先端医学研究所 特命教授）

3. HOPE事業等について

・トランスレーショナル・リサーチ（TR）若手研究者育成事業研究奨励助成金

がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、研究の成果を臨床に繋ぐトランスレーショナル・リサーチの若手研究者を育成することを目的に、研究奨励助成金を4件交付しました。

○令和6年度の助成（実績）

1件最大150万円助成 4件 助成額600万円

| | 氏名 | 所属機関 | 研究課題 |
|---|--------|----------------|--|
| 1 | 大脇 貴之 | 名古屋大学大学院医学系研究科 | 免疫チェックポイント阻害剤リチャレンジ療法の開発と機序の解明 |
| 2 | 津村 悠介 | 国立がん研究センター研究所 | 全ゲノム解析による本邦の小児悪性腎腫瘍の発症機序、病態の解明 |
| 3 | 日比野 沙奈 | 国立がん研究センター研究所 | ストレスタンパク質を発現するヒト腫瘍内T細胞集団の特性解明と新規治療戦略への展開 |
| 4 | 吉川 良平 | 群馬大学医学部附属病院 | 高悪性度肺神経内分泌腫瘍のサブグループ化とATR阻害剤を用いた新規治療法の開発 |

大脇 貴之

●名古屋大学大学院医学系研究科



研究課題名

免疫チェックポイント阻害剤リチャレンジ療法の開発と機序の解明

研究内容

免疫チェックポイント阻害剤は現状、その他の抗がん剤と同様に一度感受性が失われた腫瘍に対する再投与(リチャレンジ)は無効であり、この克服は世界的にUnmet needsとされています。申請者はマウスモデルにおいて免疫チェックポイント阻害剤抵抗性獲得と共に起こる腫瘍微小環境の変化を解析し、感受性を回復させる治療法の開発に挑戦しています。本研究により新規治療法の開発と共に、メカニズムの解明によりProof of conceptを確立し、今後の臨床応用を目指しています。

津村 悠介

●国立がん研究センター研究所



研究課題名

全ゲノム解析による本邦の小児悪性腎腫瘍の発症機序、病態の解明

研究内容

小児悪性腎腫瘍は小児がんの2-5%を占め、その大部分はWilms腫瘍である。本研究では本邦の小児腎腫瘍患者88例の腫瘍と正常のペア検体を用いて全ゲノムシーケンスを行い、さらに欧米で過去に行われた小児腎腫瘍の公開ゲノムデータ約300例との統合、比較解析を行った。多数例での解析を行うことで、新規ドライバー遺伝子やゲノム異常に基づく層別化因子の発見、Wilms腫瘍で認められる疫学的な人種差の原因等の解明を目指す。本研究により、小児悪性腎腫瘍の発症機序・病態についての新規知見が得られることが期待される。

日比野 沙奈

●国立がん研究センター研究所



研究課題名

ストレスシグナルを発現するヒト腫瘍内T細胞集団の特性解明と新規治療戦略への展開

研究内容

免疫チェックポイント阻害療法(ICB)下の免疫応答の本態解明には、治療応答の主体となる腫瘍浸潤リンパ球の機能的heterogeneityを理解することが非常に重要である。本研究では、最近の研究でICBの治療不奏功との関連が示唆された、ストレスシグナルHsp70(Heat shock protein 70)の高発現を特徴とする新規腫瘍内T細胞集団に注目する。この細胞集団の特性解明を通してICBの治療抵抗性メカニズムの一端を解明し、ICBの治療効果を高める新規治療戦略の開発へとつなげていく。

吉川 良平

●群馬大学医学部附属病院



研究課題名

高悪性度肺神経内分泌腫瘍のサブグループ化とATR阻害剤を用いた新規治療法の開発

研究内容

高悪性度肺神経内分泌腫瘍(HGNEC)は予後不良で、ここ数十年治療の進歩がない疾患である。本研究では、高い複製ストレスを抱えるHGNECがその生存においてDNA damage responseに高い脆弱性を抱えていることに着目し、新規治療の開発へつなげることを目的とした。これまでにATR阻害剤が非小細胞肺癌と比較して有効であること、同じHGNECでも細胞株ごとに感受性に違いが見られることが明らかとなった。本研究は、次世代シーケンサーによる網羅的解析を行うことで感受性に関わる因子を同定し、より有効なATR阻害剤との新規併用療法の確立を目指す。

がんサバイバーシップ研究支援事業 運営委員会報告

委員長

亀井 美登里 (埼玉医科大学 教授)

1. がんサバイバーシップ研究支援事業の趣旨・目的

がんの診断や治療を受けた“その後”を生きていくプロセス全体として、がんが長く付き合う慢性病に変化しつつある今日、「診断から治療後も充実した社会生活を送る」ための研究支援が喫緊の課題となっています。このため、(公財)がん研究振興財団は平成27(2015)年度からの新規事業として、我が国のがんサバイバーシップに関する研究の進歩・発展に大きく貢献できる研究課題に対する支援事業を実施しております。

この研究支援事業については、患者本人や家族が本来の生活の場所である家庭、職場、学校、地域コミュニティなどで暮らしていく過程で直面する、差別・偏見等の様々な課題解決に関する研究を確立するという大きな目標に向かって、がんになっても自分らしく生きる力を引き出し、ともに乗り越えるためのさまざまな課題を明らかにし、これを解決するための研究を支援することを目的に研究助成金の交付を行っています。

2. がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員会について

研究助成事業に係る審議を行うため、次の名6名により構成されています。(委員名簿：五十音順)

亀井 美登里 (埼玉医科大学 教授)

高橋 都 (NPO 法人日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事)

竹内 朋子 (東京医療保健大学大学院 教授)

田中 徳雄 (元日本製薬工業協会 常務理事)

中川原 章 (社会福祉法人椎原寿恵会 理事長)

若尾 文彦 (国立がん研究センターがん対策情報センター本部 副本部長)

3. 令和6(2024)年度研究助成について

(1) 研究助成課題の公募

がんサバイバーの生きる力を引き出すような支援を目的とした研究課題について、令和6(2024)年9月1日～10月31日の間、個人、グループ・団体(患者団体等を含む)、企業等を対象に一般課題及び指定課題の公募を行い、13課題の応募を得ました。

(2) 令和6(2024)年度の研究助成実績

運営委員会において審議した結果、5 課題を採択しました。

(5 課題 助成総額 2,386,040 円)

| | 氏名 | 所属機関 | 研究課題名 |
|---|-------|----------------------------|---|
| 1 | 齊藤 祐毅 | 東京大学医学部附属病院 耳鼻咽喉科・頭頸部外科 | 頭頸部がんサバイバーシッププログラムの構築 |
| 2 | 中口 拓真 | 医療法人明星会 星野クリニック | 地域在住の悪液質高齢がんサバイバーに対する訪問リハビリテーションの支え—生活の質と栄養状態を支える包括的な在宅ケアの実態調査— |
| 3 | 遠山 柊介 | 田上病院 リハビリテーション科 | 食道癌術後患者に対する退院後の遠隔リハビリテーションシステムの展開：実現可能性の検証 |
| 4 | 西川 英里 | 国立がん研究センター 中央病院 精神腫瘍科 | AYA 世代がんサバイバーの主観的な「社会復帰」達成度と関連因子の実態解明 |
| 5 | 大町 太一 | 関西医科大学 小児科学講座 | メタバースを活用した小児がんサバイバーがつながり合う空間の開発 |

4. がんサバイバーシップ研究支援事業の研究成果について

(1) がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナー

(令和7(2025)年2月7日 国立がん研究センターセミナールームとオンラインのハイブリッド開催)

第1部として令和5(2023)年度に研究支援を実施した一般課題4件についての研究成果発表会を、そして第2部として、「がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき」をテーマに5名の先生方からご講演をいただくセミナーを開催いたしました。

なお、全体で230名余の参加申し込みを頂き、大変有意義な一日となりました。

(2) がんサバイバーシップ研究支援事業の成果について

平成27(2015)年度にスタートした本事業によって、がんサバイバーの方々が抱える様々な課題の解決を目指す研究テーマを支援・推進して参りました。こうした研究成果として、患者団体やNPO活動の活性化が図られた他、教育問題、就労問題、社会復帰対策等、サバイバーの方々を取り巻く様々な社会問題についても幅広くテーマ設定を行い、解決すべき課題や解決に向けたプロセスの明確化が図られました。更には、合併症や後遺症に悩むサバイバーのための各種ツールやプログラムの開発等研究テーマ領域の一層の拡大と着実な進展がみられています。

これらの研究成果の中から、今後がんサバイバーの皆さんのQOL(生活の質)向上に直結する有用な知見・技術や成果物が世に出ることを大いに期待しております。

齊藤 祐毅

● 東京大学医学部附属病院



研究課題名

頭頸部がんサバイバーシッププログラムの構築

研究内容

頭頸部癌の治療は多彩な治療を行うため、頭頸部癌サバイバーは多面的な課題を有しています。本課題では頭頸部癌サバイバーが直面する課題を整理し、実践可能な頭頸部がんサバイバーシッププログラムの構築を目指します。具体的には、欧米のガイドラインを参考に、日本の実臨床に即したプログラムを策定し、患者団体および診療所を対象にアンケートを実施し、適用可能な内容へ練り上げます。最終的には、診療所における対応可能な範囲の可視化と、サバイバーの適切な医療アクセスを促進し、QOL向上に寄与したいと考えています。

中口 拓真

● 医療法人明星会 星野クリニック



研究課題名

地域在住の悪液質高齢がんサバイバーに対する訪問リハビリテーションの支え —生活の質と栄養状態を支える包括的な在宅ケアの実態調査—

研究内容

本研究では、地域在住の悪液質を有する高齢がんサバイバーに対する訪問リハビリテーションの実態を明らかにし、生活の質と栄養状態の維持に役立つ介入の可能性を検討します。悪液質は身体機能の低下を伴い、適切な支援なしには日常生活の自立が難しくなります。本研究を通じて、訪問リハビリの効果を検証し、より適切な支援体制の構築に貢献したいと考えております。微力ながら、本研究が支援を必要とする方々やそのご家族にとって有益な知見となることを願い、誠実に取り組んでまいります。

遠山 柁介

● 田上病院



研究課題名

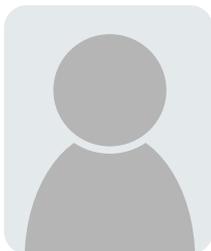
食道癌術後患者に対する退院後の遠隔リハビリテーションシステムの展開：実現可能性の検証

研究内容

食道癌手術は患者への身体的負担が大きく、術後の健康関連QOLの回復が遅延します。それに加えて、術後の身体活動量は再発にも関連することから、退院後のリハビリテーションの継続は重要です。一方で、医療機関への通院がリハビリテーション継続の障壁となっており、それを打開するためにも、われわれは独自の遠隔リハビリテーションシステムを開発しました。しかし、食道癌患者を対象とした検証は十分に実施できていないため、本システムの運動プログラムの妥当性や安全性を検証し、将来的に社会実装することを目指します。

西川 英里

● 国立がん研究センター中央病院



研究課題名

AYA世代がんサバイバーの主観的な「社会復帰」達成度と関連因子の実態解明

研究内容

AYA世代のがん患者は多様なライフイベントを背景に様々な悩みを抱きやすく、また希少がんが多いため支援に必要な情報が集まりづらい。特に、サバイバーの社会復帰の実態が解明されておらず、支援体制が確立されていない。本研究では、患者の声をもとに、AYA世代がんサバイバーの社会復帰における心理的実態とアンメットニーズを調査する。患者本人の主観的な社会復帰達成度や、優先的に解決すべきアンメットニーズの調査を行い、社会復帰に支障を感じやすい高リスク群を抽出し、支援の在り方を探索する。

大町 太一

● 関西医科大学



研究課題名

メタバースを活用した小児がんサバイバーがつながり合う空間の開発

研究内容

小児がんの治療成績の向上に伴い、多くがサバイバーとして長期生存が可能となりました。その反面、がんサバイバーはうつ病や不安障害などの精神障害の発症頻度が高いことが問題となっています。当事者同士が交流し悩みや不安を共有することが精神障害の発症予防に重要であり、新しい交流システムとしてメタバース空間を構築しました。本研究では、メタバース空間利用者へアンケート調査を行い、得られた問題点や課題を、随時、改善・改良に活かし、より有効性と安全性の高いメタバース空間の確立を目指します。

海外派遣研究助成委員会報告

委員長

菅野 純夫（一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事）

1. 海外派遣研究助成事業について

（公財）がん研究振興財団は、がんに関する研究の推進を図るため研究助成を推奨するとともに、その成果を国民に還元・普及を図り、もってがんの予防・診断・治療に寄与することを目的に、種々の事業を行っています。

本委員会が担当しているのは、研究助成事業の中で行われる「海外派遣研究者への助成事業」です。

がんを専門分野とする医師をはじめとする研究者による、短期間、海外で研究成果の発表、研究に関する協議、研究施設調査、研究資料の収集等の先進的な研究活動に必要な海外派遣研究助成を行うものです。

応募の資格は、がんに関する基礎研究や臨床研究に従事する医師をはじめとする若手研究者で将来指導者として期待され、所属長からの推薦者となっています。令和6年度の助成金額等は、事業計画の範囲で200万円を限度に1件20万円以内で交付数は10名程度としています。

2. 海外派遣研究助成委員会について

令和6年度の委員会は、3名の委員、菅野純夫委員（一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事）、藤田直也委員（公益財団法人がん研究会 がん化学療法センター所長）、若尾文彦委員（国立がん研究センターがん対策情報センター本部 副本部長）で構成されています。

委員会としての助成決定に当たっては、

- (1) 参加希望学会の重要性を考慮する。
- (2) 同じ学会に参加する申請の場合、口演か、示説かを考慮する。
- (3) 一部の施設への助成に偏らないよう公平性を考慮する。
- (4) 過去に助成を受けた頻度を勘案し、特定個人に偏らないよう公平性を考慮する。
- (5) 本年度は10件の助成を行う。
- (6) 所属長の推薦理由を考慮する。
- (7) 若手医師等研究者への助成の観点から40歳を目途に年齢を考慮する。

以上を踏まえ、書面審査を含めて計5回の委員会において、慎重なる審議の結果、10名への助成を決定しました。

3. 令和6年度の海外派遣研究助成

- 1) 32nd Meeting of the European Society of Thoracic Surgeons
(第32回欧州胸部外科学会学術集会 バルセロナ・スペイン) 1名(示説)
- 2) American Urological Association Annual Meeting 2024 (米国泌尿器科学会議 2024 サンアントニオ・アメリカ) 1名(口演・示説)
- 3) Digestive Disease Week 2024 (米国消化器病週間 ワシントン・アメリカ) 1名(口演)
- 4) American Association for Cancer Research Annual Meeting 2024 (米国癌学会年次総会 サンディエゴ・アメリカ) 1名(示説)
- 5) 13th World Research Congress of the European Association for Palliative Care (第13回欧州緩和ケア学会世界研究会議 バルセロナ・スペイン) 1名(示説)
- 6) ASTRO's 66th Annual Meeting (第66回米国放射線腫瘍学会 ワシントン・アメリカ) 1名(示説)
- 7) Asian Pacific Digestive Week 2024 (アジア太平洋消化器病週間) 1名(口演)
- 8) San Antonio Breast Cancer Symposium 2024 (サンアントニオ乳癌シンポジウム 2024) 1名(示説)
- 9) The 40th Annual EAU Congress (第40回欧州泌尿器科学会学術集会) 1名(口演・示説)
- 10) SAGES 2025 Annual Meeting (米国内視鏡外科学会 2025) 1名(口演)

4. 海外派遣研究助成の成果

コロナ禍が収まり、ようやく内外の学術集会や学術交流がコロナ前のレベルに復帰したと喜んでおりましたところ、今度は、思いもよらぬ円安の嵐に襲われました。このような厳しい状況のなかで、何とか当初の計画通り、10名の支援ができましたのも、皆様のご寄付、ご支援の賜物と深く感謝をしております。海外の学術集会に参加し研究成果を発表することは、これから指導者たるべき若手の医学研究者等が、自らのがん研究の方向性を確認し、世界の動向を肌で感じる貴重な機会を与えます。そこで各人が何を感じ、何を得たのか。その一端は、助成対象者が帰国後1ヶ月以内に当財団に提出することになっている研究成果報告書や、その他参考となる資料に見ることが出来ます。これらの報告書等は財団ホームページに掲載させていただきました。若き有為の医学研究者が得たものを、がん研究者間で、また本事業に寄付を頂いた方々と研究者との間で分かち合うことができればと考えた次第です。ぜひ、ホームページにご来訪いただき、皆様のご支援の成果をご確認いただけますようお願い申し上げます。

令和6年度 海外派遣研究助成金受賞者

| | 氏名 | 所属 | 派遣先 | 開催地 |
|----|--------|-------------------------|--|-------------------|
| 1 | 住谷 隆輔 | 順天堂大学医学部附属 順天堂医院 | 32nd Meeting of the European Society of Thoracic Surgeons (第 32 回欧州胸部外科学会学術集会) | バルセロナ (スペイン) |
| 2 | 大脇 貴之 | 名古屋大学大学院 | American Urological Association Annual Meeting 2024 (米国泌尿器科学会議 2024) | サンアントニオ (アメリカ) |
| 3 | 森久 芳樹 | 神戸市立医療センター 中央市民病院 | Digestive Disease Week 2024 (米国消化器病週間) | ワシントン (アメリカ) |
| 4 | 近藤 知大 | 京都大学医学部附属病 院／京都大学大学院 | American Association for Cancer Research Annual Meeting 2024 (米国癌学会年次総会) | サンディエゴ (アメリカ) |
| 5 | 久保 絵美 | 国立がん研究センター 東病院 | 13th World Research Congress of the European Association for Palliative Care (第 13 回欧州緩和ケア学会世界研究会議) | バルセロナ (スペイン) |
| 6 | 喜多 望海 | 名古屋市立大学 大学院医学研究科 | ASTRO's 66th Annual Meeting (第 66 回米国放射線腫瘍学会) | ワシントン (アメリカ) |
| 7 | 上田 駿介 | 静岡県立 静岡がんセンター | Asian Pacific Digestive Week 2024 (アジア太平洋消化器病週間) | インドネシア (バリ) |
| 8 | 鶴我 朝子 | 昭和大学江東豊洲病院 | San Antonio Breast Cancer Symposium 2024 (サンアントニオ乳癌シンポジウム 2024) | サンアントニオ (アメリカ) |
| 9 | 鈴木 光太郎 | 神戸大学 医学部附属病院 | The 40th Annual EAU Congress (第 40 回欧州泌尿器科学会学術集会) | マドリード (スペイン) |
| 10 | 水野 良祐 | 京都大学大学院 | SAGES 2025 Annual Meeting (米国内視鏡外科学会 2025) | ロサンゼルス (アメリカ) |

住谷 隆輔

● 順天堂大学医学部付属順天堂医院



派遣先／渡航期間

32nd Meeting of the European Society of Thoracic Surgeons
(第32回欧州胸部外科学会学術集会) (バルセロナ、スペイン) / 2024.5.24 ~ 5.29

研究内容

今回は、2024年5月にバルセロナで開催された欧州胸部外科学会で、リンパ節転移を伴わない術後病期IIからIII A期の非小細胞肺癌において、血管浸潤が独立した再発リスクとなること、非血管浸潤例では累積再発リスクが通常術後化学療法を行わないStage I期相当であることを報告しました。また、胸部外科領域の疾患について、最新のトピック、治療方針等についての討論を行うシンポジウムにAsia代表として登壇を行いました。本会への参加をきっかけとし、現在、血液サンプルを用いた肺癌に関する国際共同研究の立ち上げを行っています。

大脇 貴之

● 名古屋大学大学院



派遣先／渡航期間

American Urological Association Annual Meeting 2024
(米国泌尿器科学会議2024) (サンアントニオ、アメリカ) / 2024.5.2 ~ 5.7

研究内容

AUA年次総会の中で開催された研究フォーラム「Early-Career investigators showcase」に日本代表として登壇発表する機会をいただきました。「免疫チェックポイント阻害剤が効きづらい尿路上皮がんに対して如何に治療効果を増強させるか」という課題に対して、腫瘍間質に存在するがん関連線維芽細胞をがんの味方から敵へと変化させることで腫瘍免疫微小環境をも変化させる治療法を開発しました。今後もPhysician-Scientistとして基礎研究から臨床への還元を目指してまいります。

森久 芳樹

● 神戸市立医療センター中央市民病院



派遣先／渡航期間

Digestive Disease Week 2024
(米国消化器病週間) (ワシントン、アメリカ) / 2024.5.17 ~ 5.23

研究内容

私は、Digestive Disease Week 2024に参加し、Plenary Session (ASGE Presidential Plenary) 及び Topic Forum (What is the Evidence Telling Us in 2024? RCT's In AI in Endoscopy) で口頭発表を行いました。下部消化管内視鏡検査において、コンピューター診断支援システム(CADe)を使用することで腺腫発見割合(ADR)の向上を認める報告は散見されますが、ほとんどはアカデミックセンターでの報告であることから、より実臨床に即した市中病院での有効性を検討しました。RCTでは、ADRは標準検査群とCADe使用群で有意な差は認めませんでした(54.5% vs 50.7%, P=0.234)。国際学会でこの結果を議論できたことは、CADeの今後の展望を考察する上で非常に有意義でありました。

近藤 知大

● 京都大学医学部付属病院／京都大学大学院



派遣先／渡航期間

American Association for Cancer Research Annual Meeting 2024
(米国癌学会年次総会) (サンディエゴ、アメリカ) / 2024.4.2 ~ 4.11

研究内容

IDH1変異胆道癌に対して、IDH1阻害剤(ivosidenib)は米国FDAで承認されている。しかし、ivosidenib単剤での臨床効果は限定的であり、効果予測のためのバイオマーカーの同定が求められている。我々は、IDH1阻害剤に対する耐性バイオマーカーを探索するために、ゲノムワイドCRISPRスクリーニングを実施した結果、ARID1AノックアウトがIDH1変異胆道癌細胞株において治療効果を低下させることを示唆した。この度の海外派遣は、新たな国際連携を得る契機となり、本研究結果の検証を目的とした、臨床データに基づく包括的な検討の具体的な計画を推進する大きな後押しとなった。

久保 絵美

● 国立がん研究センター東病院



派遣先／渡航期間

13th World Research Congress of the European Association for Palliative Care
(第13回欧州緩和ケア学会世界研究会議) (バルセロナ、スペイン) / 2024.5.14 ~ 5.20

研究内容

患者と家族の医療管理能力に基づく在宅ケアの実現可能性に関する、がん薬物療法専門医と在宅医療医の認識の違いについてポスター発表を行った。在宅酸素療法、褥瘡の管理、気管チューブの管理などで認識の差が大きいことを報告した。他にも在宅ケアへの移行に関する研究の報告が複数あり、各国の医療連携の実際や改善点に関して熱心に議論された。本学会参加で得た経験を今後の研究に活かしていきます。ありがとうございました。

喜多 望海

● 名古屋市立大学 大学院医学研究科



派遣先／渡航期間

ASTRO's 66th Annual Meeting
(第66回米国放射線腫瘍学会) (ワシントン、アメリカ) / 2024.9.28 ~ 10.3

研究内容

ASTRO's 66th Annual Meetingに参加し、中枢性肺癌に対する定位放射線治療後の放射線肺炎の予測因子と気管支の線量制約について発表した。中枢性肺癌の定位放射線治療後に症候性放射線肺炎が多い原因として、気管支の影響が強いという仮説を立て、気管支への照射線量と症候性放射線肺炎の相関関係を解析した。気管支のV15Gyを1.2cc以下にすることが、症候性放射線肺炎を防ぐための指標となり得ることを報告した。本研究発表後にディスカッションを行い、共同研究の提案も頂くことができ、非常に有意義な学会参加となった。

上田 駿介

● 静岡県立静岡がんセンター



派遣先／渡航期間

Asian Pacific Digestive Week 2024
(アジア太平洋消化器病週間) (インドネシア、バリ) / 2024.11.20 ~ 11.25

研究内容

食道胃接合部癌をEGJへ進展しない噴門部癌と進展する腺癌に分類し、臨床組織学的特徴を比較し口演を行った。前者は高齢でH.pylori感染率が高く、SM浸潤が少なかった。一方で後者は食道裂孔ヘルニアや逆流性食道炎の頻度が高く、SM浸潤や脈管侵襲の傾向が認められた。これにより、EGJへの進展による食道胃接合部癌の違いが明らかとなった。食道胃接合部癌は今後アジアで増加することが予想され、活発な議論を行うことができ、大変貴重な機会を得た。

鶴我 朝子

● 昭和大学江東豊洲病院



派遣先／渡航期間

San Antonio Breast Cancer Symposium 2024
(サンアントニオ乳癌シンポジウム2024) (サンアントニオ、アメリカ) / 2024.12.10 ~ 12.15

研究内容

95-Gene Classifier (95GC) は、ホルモン陽性HER2陰性リンパ節転移陰性乳癌における術後再発リスクを予測する遺伝子解析ツールとして実用化されている。今発表ではリンパ節転移陽性乳癌における95GCの有用性について報告した。術後化学療法が省略可能な症例群の層別化が期待できる結果が得られ、今後は95GCの適応拡大に向けた多施設共同研究を計画したいと考えている。本学会でもがんの個別化医療に関する発表が多く取り上げられており、遺伝子解析を用いた治療選択は重要な課題であることを実感できた。

鈴木 光太郎 ● 神戸大学医学部附属病院



派遣先／渡航期間

The 40th Annual EAU Congress
(第40回欧州泌尿器科学会学術集会) (マドリド、スペイン) / 2025.3.21 ~ 3.25

研究内容

転移性前立腺癌に関する発表を行った(ポスター:1、口演:2)。2演題では去勢抵抗性前立腺癌に対するカバジタキセル療法をテーマとし、それぞれmodified Glasgow Prognostic Score と Systemic Inflammation Indexの予後予測能、80歳以上への投与の是非について検討を行った。また残りの1演題では多施設の1296例のデータを元に薬物治療におけるPSA早期低下の予後予測能を検討した。いずれの演題でも前立腺癌の薬物治療で世界を牽引する欧州の医師らとディスカッションをすることができ、今後の診療や臨床研究において非常に有益な機会であった。

水野 良祐 ● 京都大学大学院



派遣先／渡航期間

SAGES 2025 Annual Meeting
(米国内視鏡外科学会 2025) (ロサンゼルス、アメリカ) / 2025.3.7 ~ 3.16

研究内容

2025年のSAGES(Society of American Gastrointestinal and Endoscopic Surgeons)にてPlenary sessionに採択され、口頭発表を行なった。2018-21年に日本の16病院で診断されたstage I-IIIの中下部直腸腺癌患者1,053人を対象とした。主要評価項目は3年無再発生存とし、傾向スコアによる逆確率重み付け(IPTW)を用いた。536人がロボット手術、517人が腹腔鏡手術を受けた。手術時間はロボット群で有意に長く(435分 vs 366分)、Grade II以上の全合併症(28.4% vs 32.0%, RR: 0.89, 95% CI: 0.72-1.09)に有意差は認めなかった。一方、病理学的完全切除率はロボット群で有意に高く(98.2% vs 95.3%, RR: 0.38, 95% CI: 0.16-0.90)、3年無再発生存率もロボット群で有意に優れていた(83.6% vs 78.2%, HR: 0.723, 95% CI: 0.525-0.997)。

看護師・薬剤師・技師等 海外研修選考委員会報告

委員長

桑原 節子 (医療法人社団 秀幸会 千葉スマイル歯科&矯正歯科 理事)

がん医療は大きな変革の時を迎えている。がんの診断・治療には、重厚な放射線診断、治療機器の他、内視鏡手術やロボット支援手術の導入も進んでいる。また、がん研究の成果に基づき、がんの病態の解明が進み、個々の患者について細胞がん化のパスウェイが明らかにされ、その情報に基づく分子標的治療も進化している。一方で、がん対策基本法、がん対策推進計画の前後で患者・家族の悩みや負担についての全国調査を行った結果では、がんの薬物療法に関わる悩みや負担が顕著に増加していた。手術治療や放射線治療が、それぞれ縮小手術やピンポイント照射を目指しているなかで、薬物療法は、術後補助薬物療法が一般的になり、医療現場が十分には熟知していない分子標的薬が増え、多くの患者が通院で薬物療法を受けるという状況が生まれているためと考えられる。従って、がん薬物療法の副作用軽減のための支持療法の普及も現代のがん医療にとっての急務の課題である。

このような状況に対応するためには、がんという病変を治療するとともに、患者・家族の心のケアや暮らしにまで配慮しながら治療にあたるという社会的な全人的医療が重要となる。そこでその両者を実現するためには、基礎医学者や臨床医とともに、治療や心のケアや暮らしの支援を担当する様々な職種との協働作業を実践するための多職種チーム医療が一つの解決策となる。

しかるに、我が国では、がん医療に習熟した医師以外の医療スタッフが不足している。具体的には、看護師・薬剤師・検査技師・リハビリテーション技師・臨床心理士・栄養士・ソーシャルワーカーなどである。医師のレジデント制度や研修制度によって、がん医療に習熟した医師の育成は従前から試みられ、一定の成果を上げているが、医師以外の職種についての養成プログラムはあまり試みがされていない現状である。

がん研究振興財団では、がん医療に携わる基礎医学者や医師以外の医療スタッフを対象とした看護師・薬剤師・技師等海外研修制度を運用してきた。

令和6年度には、計3名が本プログラムによって海外研修を受けた。3名の職種は、診療放射線技師が1名、作業療法士が1名、薬剤師が1名で、所属は、山口大学医学部附属病院、国立がんセンター中央病院、九州大学病院が各1名であった。主な研修先はアメリカが2名、ポーランドが1名であり、著名な医療機関での研修と関連学会への出席というスケジュールが一般的で、研修期間は1週間程度であった。こうした研修報告の一部は、財団ホームページ及び機関誌「加仁」にも寄稿されており、海外施設での研修を通して、自らの能力を高め、所属施設のレベル向上に役立っている様子が見て取れる。

助成対象者に対しては、所属長の推薦が必要で研修に必要な語学力を有し、研修先からの招聘状があることなどといった条件が付されている。委員会では応募書類について審議し、助成の可否を決定しているが、現在の委員は別表の2名で構成されている。

本事業の課題は、全国的な周知が十分ではなく、また研修希望があったとしても、所属医療機関が忙しい日常診療の間を縫って職員に海外研修を受けさせることが容易ではない点である。しかし、昨今のがん医療における大きな変革の中で、医療機関の意識変革も進み、がん医療における多職種チーム医療

の重要性が認識されるようになった。その中で、すべての職種を対象に海外研修を支援する助成制度は国内には例がなく、また規模的にも本制度が最大である。一人でも多くのがん医療に習熟した医療スタッフが養成されることを期待したい。

看護師・薬剤師・技師等海外研修選考委員会

| | 氏名 | 所属 |
|-----|-------|------------------------------|
| 委員長 | 桑原 節子 | 医療法人社団秀幸会 千葉スマイル歯科 & 矯正歯科 理事 |
| 委員 | 竹内 朋子 | 東京医療保健大学大学院 教授 |

令和6年度 コメディカル海外研修助成金受賞者

| | 氏名 | 所属 | 研修施設・国際会議等 | 研修国・都市 |
|---|-------|--------------------|--|-------------|
| 1 | 川添 優介 | 山口大学 医学部附属病院 | 66th Annual Meeting&Exhibition of the American Association of Physicists in Medicine(AAPM2024) | アメリカ・ロサンゼルス |
| 2 | 櫻井 卓郎 | 国立がん研究センター 中央病院 | 1st Occupational Therapy Europe Congress (第1回ヨーロッパ作業療法学会) | ポーランド・クラクフ |
| 3 | 松金 良祐 | 九州大学病院 | 17th International conference on sarcopenia, cachexia, & wasting disorders (第17回サルコペニア、悪液質、消耗性疾患に関する国際会議) | アメリカ・ワシントン |

川添 優介

●山口大学医学部附属病院



研修施設等／渡航期間

66th Annual Meeting&Exhibition of the American Association of Physicists in Medicine(AAPM2024) (ロサンゼルス・アメリカ) / 2024.7.20 ~ 7.26

研修内容

AAPM2024に参加し、「深吸気息止め法における再現性と腫瘍の動きの不変性」に関する研究をポスター発表した。本研究では、当施設で導入した腫瘍の呼吸性移動を抑制させながら治療を実施する手法を後ろ向きに解析し、息止めの再現性の改善の余地や深吸気息止め中の腫瘍の動きを報告した。今後はコーチング技術の導入や腫瘍輪郭抽出の最適化を進め、治療効率向上を目指す。学会では深層学習を用いた予後予測や治療計画の自動化などや治療精度向上の可能性を実感した。得られた知見を研究・臨床に活かし、継続的な成果発信に努める。

櫻井 卓郎

●国立がん研究センター中央病院



研修施設等／渡航期間

1st Occupational Therapy Europe Congress (第1回ヨーロッパ作業療法学会) (クラクフ・ポーランド) / 2024.10.12 ~ 10.19

研修内容

脳腫瘍患者さんの生活支援情報は不足しており、必要な情報を得ることが困難な状況が指摘されています。これを踏まえ、「脳腫瘍患者さんのための包括的な生活支援ツールの開発」に取り組み、今回の報告を行いました。本ツールは、脳腫瘍患者さんとそのご家族向けに、専門家8名の協力のもとで開発され、7つの領域に分類したQ&A形式の情報提供を特徴としています。質疑応答では、支援情報の統合や翻訳版作成の要望が寄せられ、国際的な課題の共有とツール改良への示唆を得ることができました。

松金 良祐

●九州大学病院



研修施設等／渡航期間

17th International conference on sarcopenia, cachexia, & wasting disorders (第17回サルコペニア、悪液質、消耗性疾患に関する国際会議) (ワシントン・アメリカ) / 2024.12.5 ~ 12.10

研修内容

2024年12月に開催された17th SCWDに参加し、カヘキシアを併発した進行期肺癌患者に対するアナモレリンの有効性・安全性を検討する前向き観察研究について発表した。アナモレリンは非小細胞肺癌患者を中心に開発が進められ、肺癌患者におけるエビデンスは確立されていなかった。我々の観察研究では、肺癌患者においても、臨床試験と同等の骨格筋量増加、食欲関連QOLの向上、奏効率が示された。研究成果の発表を通じて、多くの研究者と活発な議論を行うことができ、今後の研究課題を考える大変有意義な機会を得ることができた。

事業実績

2000～2024

I. がん情報提供支援事業

- 患者本位の「がん治験情報サイト」

II. 若手研究者の育成事業

- トランスレーショナル・リサーチ (TR) 研究奨励助成

III. 研究助成事業

- がん研究助成
- がんサバイバーシップ研究助成

IV. 海外派遣・招へい研究助成事業

- 海外派遣研究助成

V. 技術者研修助成事業

- 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

VI. 研究成果等普及啓発事業

- 国際がん研究シンポジウムの開催
- がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催

VII. 広報活動事業

I. がん情報提供支援事業

■ 患者本位の「がん治験情報サイト」

患者さんやそのご家族が信頼できる最新のがん情報が検索でき、利用しやすいシステムとして製薬企業の協力により開設。

(詳細は「がん情報提供支援事業運営委員会報告」を参照)

2021.10. 1 非小細胞肺癌 公開

2022. 7. 1 血液がん 公開

2023. 1. 1 乳がん・子宮頸がん 公開

公開情報からの検索システム構築

2023.10.23 全12領域の企業治験情報（総ID数約500件）の登録

医療機関別治験情報公開

2024. 1.22 小児及びAYA世代のがん、希少がん、原発不明がん、

支持療法や緩和ケアの治験情報公開

2024 6.10 小児AYAの医師主導・特定臨床研究公表

2024 9. 3 サイト名称の改定、サイトレイアウトの全面更新

2024.10.25 フリーワード検索機能の実装



II. 若手研究者の育成事業

■ トランスレーショナル・リサーチ (TR) 研究奨励助成

がん研究の第一線で活躍する研究者の指導を受け、研究の成果を臨床につなぐトランスレーショナル・リサーチの若手研究者を育成することを目的に、研究奨励助成金を交付。

| 年度 | 医学 | 歯学 | 理学 | 薬学 | 農学 | その他 | 計 |
|------|----|----|----|----|----|-----|---|
| 2022 | 2 | | | 1 | 2 | | 5 |
| 2023 | 1 | | 1 | 1 | | | 3 |
| 2024 | 3 | | | 1 | | | 4 |

Ⅲ. 研究助成事業

■ がん研究助成

わが国のがん研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究に対して、昭和43年、当財団創設以来毎年研究助成金を交付。

がん研究助成は、財団に寄せられた一般の方々からの貴重な浄財を以て実施している事業で国の各種研究助成金や、各種財団の研究助成金とは一線を画する。

● がん研究助成金実績

昭和43年度から毎年助成しており、交付者数は平成29年度までに1,000名を超える実績となっているため、以下の実績を抜粋して掲載する。

がん研究助成金交付実績(2015(H27)～2024(R6)年の10年間)

| 年度 (回) | 2015 (48) | 2016 (49) | 2017 (50) | 2018 (51) | 2019 (52) | 2020 (53) | 2021 (54) | 2022 (55) | 2023 (56) | 2024 (57) |
|-----------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 交付件数 | 23 | 23 | 28 | 32 | 30 | 29 | 30 | 27 | 25 | 25 |

■ がんサバイバーシップ研究助成

2014(H26)年からの「がん研究10か年戦略」に基づく「充実したサバイバーシップを実現する社会の構築」を目指した研究課題に関する研究の進歩・発展に貢献することが大きいと考えられる研究課題に対し、指定寄付事業として研究助成金を交付。

| 年度 | 医学 | 歯学 | 理学 | 薬学 | 看護学 | その他 | 計 |
|-----------|----|----|----|----|-----|-----|----|
| 2015(H27) | 2 | | | | 3 | 11 | 16 |
| 2016(H28) | 4 | 1 | | | 1 | 3 | 9 |
| 2017(H29) | 5 | | | | 1 | 5 | 11 |
| 2018(H30) | 5 | 1 | 1 | | 1 | 2 | 10 |
| 2019(R1) | 4 | | 2 | | 2 | 2 | 10 |
| 2020(R2) | 7 | | | | 1 | 2 | 10 |
| ※2021(R3) | | 1 | 1 | | 2 | 1 | 5 |
| ※2022(R4) | 1 | 1 | | | 1 | 2 | 5 |
| ※2023(R5) | | 2 | | | 1 | 1 | 4 |
| ※2024(R6) | 3 | | 2 | | | | 5 |

※令和3年度から研究助成金の募集はがん研究助成金に統合。

IV. 海外派遣・招へい研究助成事業

■ 海外派遣研究助成

がんを専門分野とする医師および研究者が行う海外での研究の発表・協議、施設調査、研究資料の収集などの先進的な研究活動に対して、旅費等の助成金交付。

(過去7年の実績)

| 年度 | 派遣者数 |
|------------|--------------------|
| 2018 (H30) | 20 |
| 2019 (R1) | 16 |
| 2020 (R2) | 新型コロナウイルス感染拡大のため中止 |
| 2021 (R3) | |
| 2022 (R4) | 0 |
| 2023 (R5) | 8 |
| 2024 (R6) | 10 |

V. 技術者研修助成事業

■ 看護師・薬剤師・技師等海外研修者への助成

がんを専門分野とする看護師・薬剤師・放射線技師等のメディカルスタッフに対し、海外での先進的な研修に対して旅費等の助成金を交付。

| 年度 | 看護 | 放射線 | 臨床検査 | 薬剤 | SW | 理学・作業療法士 | 言語聴覚士 | 計 |
|----------------------|--------------------|-----|------|----|----|----------|-------|-----|
| 2000～2003 (H12～H15) | 28 | 11 | 8 | 10 | 0 | 0 | | 57 |
| 2004～2013 (H16～H25) | 38 | 52 | 5 | 37 | 1 | 3 | | 136 |
| 2014 (H26) | 2 | 5 | 0 | 1 | 0 | 1 | | 9 |
| 2015 (H27) | 4 | 2 | 1 | 1 | 0 | 1 | | 9 |
| 2016 (H28) | 0 | 6 | 0 | 2 | 0 | 1 | | 9 |
| 2017 (H29) | 2 | 5 | 0 | 1 | 0 | 2 | | 10 |
| 2018 (H30) | 3 | 6 | 0 | 0 | 0 | 1 | | 10 |
| 2019 (R1) | 2 | 4 | 0 | 1 | 0 | 0 | | 7 |
| 2020 (R2), 2021 (R3) | 新型コロナウイルス感染拡大のため中止 | | | | | | | |
| 2022 (R4) | 0 | | | | | | | |
| 2023 (R5) | | 1 | | | | | 1 | 2 |
| 2024 (R6) | | 1 | | 1 | | 1 | | 3 |

VI. 研究成果等普及啓発事業

■ 国際がん研究シンポジウムの開催

世界の著名ながん研究者を招いて日本人研究者とのシンポジウムを開催。

| 年度 | テーマ |
|-----------|---------------------------|
| 2004～2013 | 胃がんの基礎と臨床－最近の進歩－ |
| | 前立腺がんをめぐる課題と挑戦 |
| | 感染、がんと予防 |
| | がん根治手術後の生理学的変化と QOL |
| | 最近の放射線腫瘍学：技術の進歩と臨床導入への研究 |
| | 頭頸部・食道がんの基礎と臨床－最近の進歩－ |
| | 科学の発展を乳癌治療へ～新たなる挑戦～ |
| | 悪性脳腫瘍～現状と展望～ |
| | 放射線とがん |
| | 世界のがん研究は今～次期対がん戦略に向けた課題～ |
| 2014～2018 | 希少がん：望ましい医療・研究体制を探る |
| | 難治がん克服に向けた最新の治療戦略 |
| | 次世代免疫療法・ゲノム医療 |
| | 小児および AYA がん |
| 2019・2020 | 新型コロナウイルス感染拡大のため中止 |
| 2021 | 全ゲノム解析が変革するがん研究・がん医療 |
| 2022 | WGS, Long-read and Beyond |
| 2023 | 次世代の抗がん剤開発 |
| 2024 | がんRNA標的創薬の展望 |

※ 2021 年以降は会場とオンラインのハイブリッド開催

■ がんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーの開催

「がんサバイバーシップ研究助成金」交付者の研究成果報告と、がんサバイバーシップに関する正しい知識の普及を目的としたセミナーの開催。

| 年度 | テーマ |
|------|--|
| 2016 | 第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーシップ研究の射程と国内外の展開 |
| 2017 | 第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：今日からできるセルフケア |
| 2018 | 第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：親の私のがんになったとき～知りたい！子どもサポート |
| 2019 | 第1部 がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：ケア提供者としてがんサバイバーを支えるということ |
| 2020 | がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告（オンライン開催） ※セミナーは新型コロナウイルス感染拡大のため中止。 |
| 2021 | がんサバイバーシップ研究助成金交付者の成果報告（オンライン開催） ※セミナーは新型コロナウイルス感染拡大のため中止。 |
| 2022 | 第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 がんサバイバーシップ研究助成金過去採択者の継続発展研究報告 |
| 2023 | 第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーの情報アクセス向上を目指して |
| 2024 | 第1部 がん研究助成金C課題交付者の成果報告 第2部 セミナーテーマ：がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき |

※ 2022年以降は会場とオンラインのハイブリッド開催

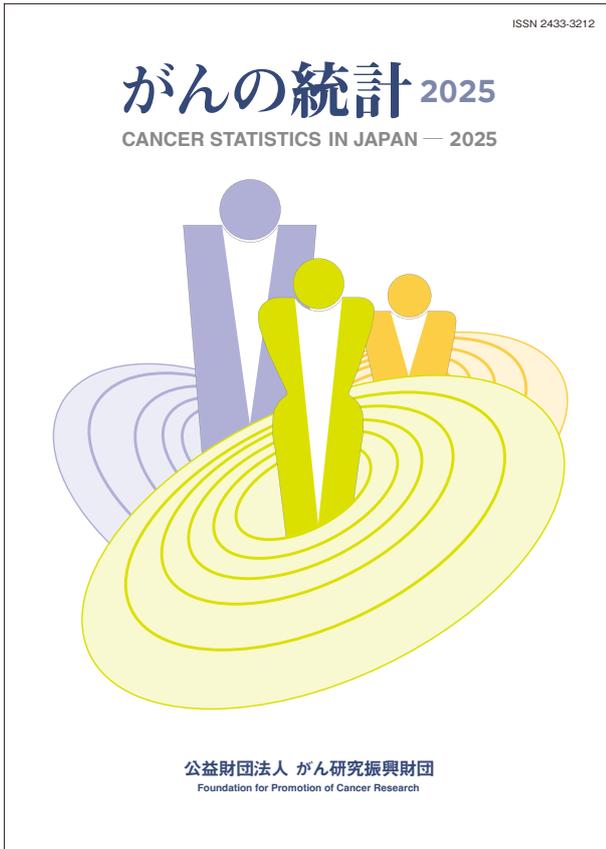
Ⅶ. 広報活動事業

● 正しいがん知識の普及・がん研究者等への資料の提供

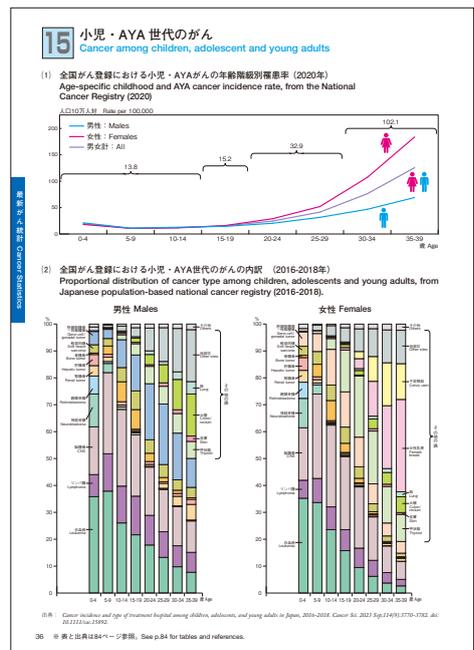
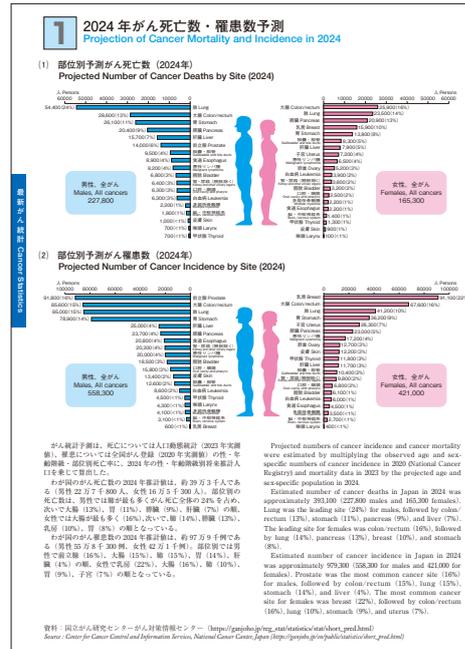
一般の方々にも理解できるがん研究に関する最新情報の提供及びがん予防の知識などを各自治体、がん診療連携拠点病院、研究機関等などのほか、全国の公立中学校にも広く情報提供。

(1) 広報活動

①がんの統計2025



本書は“わかりやすいがん統計本”として1974（昭和49）年から厚生労働省、国立がん研究センター、大阪国際がんセンター、弘前大学医学部付属病院、（公財）放射線影響研究所等の協力により、英訳を含めて編集した貴重な資料です。（年1回発刊）



②がんを防ぐための新12か条および12か条ハンドブック



この冊子は、1978（昭和53）年から「がん予防の12箇条」としてがん予防のための生活改善情報を提供してきたものを、日本人を対象とした疫学調査などの科学的な研究で明らかにされた確かな証拠をもとに改訂を重ね、現在に至っています。



「がんを防ぐための新12か条」を

- 喫煙とがん
- 飲酒とがん
- 食事とがん
- 運動・体形とがん
- 感染とがん
- 検診・診療とがん
- 情報とがん

の7項目に分け、詳しく解説しました。

③「やさしいがんの知識」・「がん検診」・「がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット」（一般財団法人日本宝くじ協会の助成により作成）



④その他



(2) これまでの広報活動実績

| 年度 | 事業内容 |
|------|--|
| 2018 | がんの統計 |
| | がん治療中の食事サポートブック2018 |
| | がん検診 |
| | やさしいがんの知識2018 |
| | がん治療と食生活～栄養士・歯科医・看護師からのヒント～ |
| | こころとからだを支える がんサバイバーのための かんたんおいしいレシピ② |
| 2019 | がんの統計 |
| | やさしいがんの知識2019 |
| | がん検診 |
| | がん治療における口腔支持療法のための口腔乾燥症対応マニュアル |
| | 多職種から学ぶ：がん看護の基礎（食事を支えるケア編） |
| 2020 | がんの統計 |
| | がんを防ぐための新12か条ハンドブック |
| | やさしいがんの知識2020 |
| | がん検診2020 |
| | がん治療中の食事サポートブック2020 |
| | がん治療前の食事のヒント改訂版 |
| 2021 | がんの統計 |
| | 改訂版がん治療と食生活～栄養士・看護師・歯科医からのヒント |
| | やさしいがんの知識2021 |
| | がん検診2021 |
| | がんサバイバーのためのかんたんレシピ2022 |
| 2022 | がんの統計 |
| | やさしいがんの知識2022 |
| | がん検診2022 |
| | 知っておきたい放射線治療 改訂版 |
| | がん治療中の食事サポートブック2023 |
| | がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット |
| 2023 | がんの統計 |
| | やさしいがんの知識2023 |
| | がん検診2023 |
| | がんターミナル期をご自宅で過ごす方の生活と食事 |
| 2024 | がんの統計 |
| | やさしいがんの知識2024 |
| | がん検診2024 |
| | がんと告知された小児・AYA世代の方がまず始めに手に取るパンフレット2024 |

令和7年度 事業計画

公益財団法人がん研究振興財団令和7年度事業計画を掲載しました。
本誌に掲載しております「令和6年度事業実績」と併せてご確認下さい。

公益財団法人がん研究振興財団 令和7年度事業計画

1. 研究助成事業

(1) がん研究助成

- ① 若手研究者が実施する、がんに関する基礎研究から臨床研究、トランスレーショナル研究に至るまで、幅広い研究分野に助成する。
- ② がんサバイバーの療育支援をはじめ、日常診療における診察や療養上の具体的な問題解決を目的とした研究課題に助成する。

(2) 海外派遣研究助成

がんに関する国際会議、国際学会への出席者に対して助成を行う。
研究費等での対応が困難な若手研究者を対象とする。

2. 関係団体助成事業

UICC（国際対がん連合）の事業に対して協力助成を行い、世界、アジア等のがん対策に貢献する。

3. がん情報提供支援事業

がん患者や家族にとって利用し易く信頼性の高い最新の企業治験情報等を提供するため、「患者本位のがん治験情報サイト」を令和3年10月に開設。同サイトは、全がん領域の治験情報を検索できる「基本情報システム」と患者等の利便性を考慮した「総合検索情報システム」で構成されている。

その後サイト機能の充実を図り、累積総アクセス件数も87万件を超えるまでに至っている。

4. 研究成果等普及啓発事業

がん研究シンポジウム及びがんサバイバーシップ研究成果発表会・セミナーとして最先端のがん研究動向の講演や研究助成の成果発表等を公開することより成果等の普及啓発を行う。

5. 出版・広報活動事業

がんに関する統計、がん関連の各種パンフレット、財団機関誌の作成・配布により、がんの予防に関する情報発信を行う。

ご寄付 芳名録

令和6年度におきましても、多くの方々からご寄付をいただき、誠に有難うございました。ここにご芳名をご披露させていただきます。

これらのご寄付は、がんで亡くなられた方のご遺志を活かすために寄せられたもの、がんと闘ったことのあるご本人から寄せられたもの、そして、その他一日も早くがんの克服されることを願う方々から寄せられたものです。

当財団と致しましては、貴重なご芳志にお報いするため、がん克服を目指す研究や診療の進歩に有効に活用させていただきますことをお誓いして、お礼に代えさせていただきます。

公益財団法人 がん研究振興財団

理事長 堀田 知光

令和6年度（令和6年4月1日～令和7年3月31日）

| 住 所 | 氏 名 |
|-------|-----------|
| 兵庫県 | 池 田 恢 様 |
| 神奈川県 | 川 口 美和子 様 |
| 青 森 県 | 柴 田 敏 則 様 |
| 広 島 県 | 野 中 俊 志 様 |
| 大 阪 府 | 松 原 都 築 様 |

（ご承諾を頂いた方のみ受付順に掲載しています）
他 総件数 29件

ご寄付に添えられたお言葉の一部を
紹介させていただきます。

- 沢山の方からのお気持ちが集まったものです何卒宜しくお願い致します。

～ご厚志ありがとうございました～

ご寄付について お問い合わせ先

お問い合わせは下記までお願い致します。ご寄付の申し込みを希望される方には寄付申込書、銀行及び郵便局の振込用紙（払込手数料は不要）、特定公益増進法人であることの証明書（寄付金控除等の税法上の特典が受けられる）等の関係資料をお送りさせていただきます。

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階

公益財団法人 がん研究振興財団

TEL 03(6228)7297 FAX 03(6228)7298

E-mail : info@fpcr.or.jp

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/contribution.html>

公益財団法人がん研究振興財団 役員

令和7年4月1日

| | | |
|-------|--------|---------------------------|
| 会 長 | 垣添 忠生 | (公益財団法人日本対がん協会 会長) |
| 理 事 長 | 堀田 知光 | (国立研究開発法人国立がん研究センター 名誉総長) |
| 専務理事 | 石塚 正敏 | (公益財団法人がん研究振興財団 専務理事) |
| 理 事 | 上田 龍三 | (名古屋大学 特任教授) |
| 同 | 佐野 武 | (公益財団法人がん研究会 がん研有明病院 病院長) |
| 同 | 関谷 剛男 | (元国立がんセンター研究所 部長) |
| 同 | 田中 利彦 | (田中綜合法律事務所 代表弁護士) |
| 同 | 中釜 齊 | (国立研究開発法人日本医療研究開発機構 理事長) |
| 同 | 村上 善則 | (学校法人日本医科大学先端医学研究所 特命教授) |
| 監 事 | 亀口 政史 | (亀口公認会計士事務所 所長) |
| 顧 問 | 荒蒔 康一郎 | (公益財団法人がん研究振興財団 前会長) |

公益財団法人がん研究振興財団 評議員

令和7年4月1日

| | | |
|-------|--------|-----------------------------|
| 評 議 員 | 木村 政之 | (一般社団法人偽造医薬品等情報センター 代表理事) |
| 同 | 久保田 政一 | (一般社団法人日本経済団体連合会 副会長・事務総長) |
| 同 | 坂元 亨宇 | (国際医療福祉大学 医学部長／慶應義塾大学 名誉教授) |
| 同 | 澁谷 正史 | (上武大学 学長) |
| 同 | 菅野 純夫 | (一般社団法人柏の葉オーミクスゲート 代表理事) |
| 同 | 津金 昌一郎 | (国際医療福祉大学大学院 教授) |
| 同 | 野田 哲生 | (公益財団法人がん研究会 がん研究所 名誉所長) |

あとがき

今年是全国で山林火災が発生しています。

大船渡市では、2月26日から11日間に及ぶ山林火災が発生し建物210棟が消失しました。14年前の3月11日には東日本大震災により津波が押し寄せ家屋等に甚大な被害を受けています。津波で家を流されやっと再建した家を今度は火災により焼失してしまったという方もおられます。何とも気の毒な出来事に胸が痛くなりました。大船渡市をはじめ山林火災により被害に遭われた皆様の一刻も早い復旧をお祈りいたします。

さて「加仁」第52号が出来上がりました。

「巻頭言」は国立がん研究センター間野理事長に「がんゲノム医療の現状と将来」と題しましてご寄稿いただきました。

「特集」では国立がん研究センターでの3つのシンポジウム等の開催状況について掲載しております。

「がん研究シンポジウム」は、“がんRNA標的創薬の展望”をテーマとして開催され、シンポジウム組織委員長並びに司会進行をお願いしました吉見昭秀先生（同センター研究所がんRNA研究分野長）からご報告いただきました。

「がんサバイバーシップ研究成果発表会」は、令和5年度の研究助成金を受領された方々からの発表内容を、がんサバイバーシップ研究支援事業運営委員長の亀井美登里先生からご報告いただきました。

「がんサバイバーシップ研究セミナー」は、“がんサバイバーが病い体験を社会に活かすとき”をテーマに開催され、セミナーの企画並びに司会進行をお願いしました高橋都先生（NPO法人日本がんサバイバーシップネットワーク代表理事）からご報告いただきました。

「令和6年度事業実績」は、各委員会の委員長からご報告いただきました。

「令和7年度事業計画」は、財団が行う事業を皆様にご理解いただけるよう掲載しています。助成事業は全般的に見直しを行いました。

以上が第52号の概要ですが、今号から内容の見直しによりスリム化を図っております。

今後とも広く皆様に愛されるような機関誌「加仁」となりますよう内容の充実を務めてまいりますので、どうぞよろしくお祈りいたします。

最後に今号作成にあたりましてご協力いただきました多くの関係者の皆様にお礼申し上げます。

今後とも当財団事業へのご理解・ご協力をよろしくお祈りいたします。

(H. S)

か仁

第52号 2025

令和7年4月発行

編集

代表 堀田 知光

発行

公益財団法人 がん研究振興財団

〒104-0031

東京都中央区京橋2-8-8

新京橋ビル5階

TEL 03(6228)7297

FAX 03(6228)7298

ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>

全国がんセンター協議会加盟施設一覧

(2025年3月1日現在)

| | | |
|----------------------|-----------------------------|----------------|
| 北海道がんセンター | 〒003-0804 札幌市白石区菊水4条 2-3-54 | ☎(011)811-9111 |
| 青森県立中央病院 | 〒030-8553 青森市東造道 2-1-1 | ☎(017)726-8111 |
| 岩手県立中央病院 | 〒020-0066 盛岡市上田 1-4-1 | ☎(019)653-1151 |
| 宮城県立がんセンター | 〒981-1293 名取市愛島塩手字野田山 47-1 | ☎(022)384-3151 |
| 山形県立中央病院 | 〒990-2292 山形市大字青柳 1800 | ☎(023)685-2626 |
| 茨城県立中央病院・茨城県地域がんセンター | 〒309-1793 笠間市鯉淵 6528 | ☎(0296)77-1121 |
| 栃木県立がんセンター | 〒320-0834 宇都宮市陽南 4-9-13 | ☎(028)658-5151 |
| 群馬県立がんセンター | 〒373-8550 太田市高林西町 617-1 | ☎(0276)38-0771 |
| 埼玉県立がんセンター | 〒362-0806 北足立郡伊奈町小室780 | ☎(048)722-1111 |
| 国立がん研究センター東病院 | 〒277-8577 柏市柏の葉 6-5-1 | ☎(04)7133-1111 |
| 千葉県がんセンター | 〒260-8717 千葉市中央区仁戸名町 666-2 | ☎(043)264-5431 |
| 国立がん研究センター中央病院 | 〒104-0045 中央区築地 5-1-1 | ☎(03)3542-2511 |
| がん研有明病院 | 〒135-8550 江東区有明 3-8-31 | ☎(03)3520-0111 |
| がん・感染症センター 東京都立駒込病院 | 〒113-8677 文京区本駒込 3-18-22 | ☎(03)3823-2101 |
| 神奈川県立がんセンター | 〒241-8515 横浜市旭区中尾 2-3-2 | ☎(045)520-2222 |
| 新潟県立がんセンター新潟病院 | 〒951-8566 新潟市中央区川岸町 2-15-3 | ☎(025)266-5111 |
| 富山県立中央病院 | 〒930-8550 富山市西長江 2-2-78 | ☎(076)424-1531 |
| 石川県立中央病院 | 〒920-8530 金沢市鞍月東 2-1 | ☎(076)237-8211 |
| 福井県立病院 | 〒910-8526 福井市四ツ井 2-8-1 | ☎(0776)54-5151 |
| 静岡県立静岡がんセンター | 〒411-8777 駿東郡長泉町下長窪 1007 | ☎(055)989-5222 |
| 愛知県がんセンター | 〒464-8681 名古屋市千種区鹿子殿 1-1 | ☎(052)762-6111 |
| 名古屋医療センター | 〒460-0001 名古屋市中区三の丸 4-1-1 | ☎(052)951-1111 |
| 滋賀県立総合病院 | 〒524-8524 守山市守山 5-4-30 | ☎(077)582-5031 |
| 大阪医療センター | 〒540-0006 大阪市中央区法円坂 2-1-14 | ☎(06)6942-1331 |
| 大阪国際がんセンター | 〒541-8567 大阪市中央区大手前 3-1-69 | ☎(06)6945-1181 |
| 兵庫県立がんセンター | 〒673-8558 明石市北王子町 13-70 | ☎(078)929-1151 |
| 呉医療センター・中国がんセンター | 〒737-0023 呉市青山町 3-1 | ☎(0823)22-3111 |
| 山口県立総合医療センター | 〒747-8511 防府市大字大崎 10077 | ☎(0835)22-4411 |
| 四国がんセンター | 〒791-0280 松山市南梅本町甲 160 | ☎(089)999-1111 |
| 九州がんセンター | 〒811-1395 福岡市南区野多目 3-1-1 | ☎(092)541-3231 |
| 佐賀県医療センター好生館 | 〒840-8571 佐賀市嘉瀬町大字中原400 | ☎(0952)24-2171 |
| 大分県立病院 | 〒870-8511 大分市豊饒2-8-1 | ☎(097)546-7111 |

※全国がんセンター協議会HPより

全国がんセンター協議会に属しているこれらの施設は、がんの専門医を多数擁して、がんの診断と治療に積極的に取り組んでいます。

当財団の事業活動の多くは、皆様からの尊いご寄付により
支えられています。
皆様のご理解とご支援ご協力をお願い申し上げます。

がんを防ぐための **新** 12か条

あなたのライフスタイルをチェック
そして今日からチェンジ!!



- 1 条 たばこは吸わない

- 2 条 他人のたばこの煙を避ける

- 3 条 お酒はほどほどに

- 4 条 バランスのとれた食生活を

- 5 条 塩辛い食品は控えめに

- 6 条 野菜や果物は不足にならないように

- 7 条 適度に運動

- 8 条 適切な体重維持

- 9 条 ウイルスや細菌の感染予防と治療

- 10 条 定期的ながん検診を

- 11 条 身体の異常に気がいたら、すぐに受診を

- 12 条 正しいがん情報でがんを知ることから

発行 公益財団法人 がん研究振興財団
〒104-0031 東京都中央区京橋2-8-8 新京橋ビル5階
TEL 03 (6228) 7297
FAX 03 (6228) 7298
E-mail: info@fpcr.or.jp
ホームページ <https://www.fpcr.or.jp/>